

912.6
1657

912.6-Ki57-10ウ

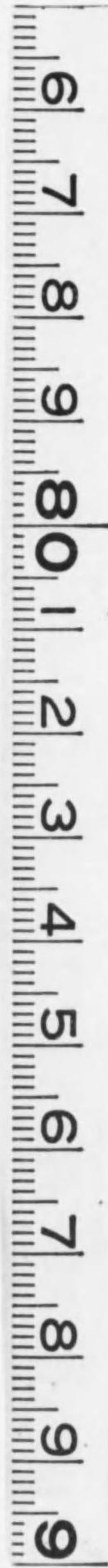


1200500757109

村で一番の栗の木

岸田國士著

白水社刊



始



912.6
KI.57
10



岸田國士著

村で一番の栗の木

白水社刊



916
176

村で一番の栗の木

目次

ママ先生とその夫……………	二六三
浅間山……………	一七三
犬は鎖に繋ぐべからず……………	一五
村で一番の栗の木……………	五二
驟雨……………	七



驟雨 (一幕)



周子

恒子

家政婦

六月の午後

洋風の客間を兼ねた書齋

朋子が割烹着を脱ぎながら、慌ただしくはいつて来る。その後から、家政婦が、何か言ひたさうにしてついで来る。

朋子 さうよ、あれはあれでいいの。(割烹着を家政婦に渡し、机の前に坐る) あと、ハンケチだけでせう。暇をみて、しといて頂戴。こがさないやうにね。ああ、それから……その前にちよつとお使ひに行つて来てくれない。そのの八百屋に苺が出てるかどうか見て、もし出てても良いのがなかつたら、驛の前まで行つてね、上等のを一箱取つて来て……。

家政婦 おいくらぐらゐのを……。

朋子 いくらでもいいことよ、良いのでさへあれや……。 (ペンを取り上げ、抽出をさがしながら) あたしちよつと、端書を書くから、それも序に入れて来るのよ。さ、支度をして頂戴。(端書を書く) ええと……。

(家政婦去る。長い間)

朋子 あ、芳澤さん……。今朝来た端書をここへちよつと……。状差に差してあるでせう、繪端書よ。

家政婦 (端書を持って来る) これでございますか。

朋子 (見ずに受け取り) ええ、それ……。 (見て) これぢやないの。今朝来たのがあるでせう。(笑ひながら) いやね、これは……。

(家政婦、これも笑ひながら去る)

海岸の寫眞よ、蒲郡つて書いてある……

家政婦 (繪端書を見ながら現る)

朋子 (引つたくるやうに) どちら……。ええ、これよ。

(間) ——「二人とも、大層氣に入り、四五日逗留の豫定……」か。

家政婦 は……

朋子 こつちのこと……。早く支度して頂戴。

(家政婦去る)

朋子 (書きながら) 「……それでは、今のうちゆつくり遊んでお置きなさい。旦那様による

しく……」と。芳澤さん、さ、これを持って……。まだなの、支度は……? あ、さう

さう、お風呂を見ていてね、行く前に……。もうお歸りになる時分だから……。

家政婦 (奥から) もうちゃんと沸いてをります。

朋子 さう。(間) そいぢや、なにしているの、あんた。

家政婦 ちよつと帯をし直してをりますんです。

朋子 帯なんか、いぢやないの、いぢいぢ……すぐそこなんだもの……。

(玄關の戸が開く音、朋子出て行く。間——)

讓 (現れる。機械的に机の上の繪端書を取り上げ、それを讀む)

朋子 (續いて現れる) すぐお風呂になさいます?

讓 (返事をしない。そのまま、奥に去る)

朋子 (やや暗い表情。ぐつたりして椅子による。が、すぐに氣を取り直して起ち上る)

讓の聲 おう。

朋子 (黙つて奥にはいる)

長い間。

玄關で「御免なさい」といふ女の聲。續いて、朋子の「あら……」といふさも意外らしい叫び聲。

朋子の聲 どうしたの……。どうして歸つて來たの。ひとり? (間) 今朝見たわ。(間) え

え、四五日逗留するつていふから、まだなかなかだと思つてたのに……。 (間) さう、まあ

お上んなさいよ。(間) うちぢや今歸つたところ。(間) いいのよ、そんなこと……。

朋子、續いて恒子現る。——恒子は、やや疲れてゐるらしい。

朋子 どうかしたんぢやない。いやね、笑つてばかりで……。

恒子 (腰かけながら) まあ、ちよつと休まして頂戴。今着いたところなの。

朋子 そいで……?

恒子 あの人? (意味ありげな微笑) 今言ふから待つてて。(溜息) ほんとにお邪魔ぢやなく

て……。

朋子 (訝かしげに) いや、あたし。そんなに笑つてばかりぢや……。恒ちゃん……。

恒子 せつかちね、姉さまは……。 (かう言ふと、急に、姉の視線を避け、ハンケチを取り出す。

眼に涙が溜つてゐる。それが、われながら可笑しいといふ風に、また笑はうとするが、もう我慢ができない。ハンケチを眼にあてると、いきなり肩をゆすつて泣く)

朋子 (途方に暮れて) 可笑しなひとね……。どうしたつていふの。(妹の肩に手をかける)

恒子 ……。

朋子 泣いてたんぢや分らないぢやないの。あの人がどうかしたの。早くおつしやいよ。

恒子 御免なさい。姉さまの顔を見たら、つい悲しくなつたの。(間) あたし、よつほど黙つてようかと思つたの。黙つて、辛抱しようかと思つたの……。だけど、もう駄目……。あんまりなんですもの……。あたし、あたし、うちへ歸るわ。(間) どうしても、いやなの。

朋子 どういやなの。

恒子 どうつて……。何もかも。

長い沈黙。

姉は、うなだれた妹の横顔を、まじまじと見入つてゐる。

朋子 喧嘩したんでせう。

恒子 いいえ、そんなことぢやないの。(間) やつぱり、いけなかつたわ。

朋子 やつぱりいけないつて……。前から何か……。

恒子 さうちやないけど、そら、行儀が悪いつて言つてたでせう。

朋子 そんなこと……？

恒子 そればかりぢやないの。ええ、つまりさうだけど、それが、ただ行儀が悪いんぢやないの、あたし、つくづく愛想がつきたわ。

朋子 男つてみんなさうよ。

恒子 そら、何時かうちへ來た時、母さまの前で欠伸をしたつて、母さまがあとで怒つてたでせう。ああいふことが、のべつ幕なしなの。それや、欠伸なんか、あたしの前でしたつてなんとも思やしないけど、他人がゐる時に、そばではらはらするやうなことを平氣でするのよ。

朋子 どんなこと……。

恒子 いちいち言へないの、あんまりいろんなことで……。汽車へ乗つてからだつてさうだわ。いきなり、腰掛の上へ脚をのつけて、ぐうぐう眠るのよ。それが、發つた日からさうよ。

朋子 話もしないで……？

恒子 話なんかするもんですか。まるで何の爲めに旅行するんだかわかりやしないわ。みんなが變な顔して見てるの。さうでせう、ハンケチもかけないで、口をあいて眠つてるんですもの。

朋子 (笑ひをこらへて) 式やなんかで草臥れたんだわ。

恒子 そいぢや、あたしはどう……。久しぶりで、あんな帯を締めてさ。

朋子 あなたは違ふわよ、女ぢやないの。

恒子 もう、姉さまも、さういふことを言ふやうになつてらつしやるのね。

朋子 ……。

恒子 それから宿屋についてからでも、女中なんかにはばかり話しかけて——戲談を言つたり……。それや變なの。御飯をたべる時なんて、あたし、お給仕してる女中に恥かしくつて……。だつて、云ふことが下司なの、——ネエさん、東京だらう。どうも田舎の女にしぢや、様子がイキだと思つた——かうなの。女中の言ふことがいいわ。——旦那も東京ですか——だつて。さうすると、變な手つきをして頭を搔くの。——いや、逆襲は恐れ入るなあ——つて。どうでせう、いやね。

朋子 恒ちやんもむづかしいわね。さういふことを言ふもんよ、男つて……。相手次第ではね。

恒子 兄さまもおつしやつて……？

朋子 ええ……。さあ、兄さまはどうだか……。

恒子 おつしやらないわよ。それからもつとひどいことがあるの。昨夜なの、それは……。——蒲郡つて、何縣？ つて訊いたら——何縣だと思ふつて聞きかへすの。姉さま知つたらつしやる？、知らないわねえ。だから、いい加減に三重縣？ つて、ただ言つてみたの。さうしたら、笑ひながら、——そいぢや、どの邊にあるか、日本の地圖を書いて、圓をつけて見ろつて言ふの。あたし、そんな女學校の試験みたいなこと、いやだつて言つてやつたの。さうしたら、紙と鉛筆とを出して、どうしても書けつてきかないの。しまひに、日本地圖も書けないのかつて、それや、しつこく言ふの。だから、あんまり癪でせう。日本の地圖ぐらゐ書けますわつて、そら、よく書いたわね、あの通り書いてやつたの。さうすると、本州だけしか書かないうちに、——なんだ、それや胡瓜かつて……。 (笑ひながら泣き出す)

朋子 え？

恒子 胡瓜かつて言つたわよ (また泣く)

朋子

(腹立たしさと、可笑さとを制しながら) すむぶん、失禮ね。

恒子 あんな人のところへ、どうして嫁く氣になつたか知ら……。デリカシイつていふものがちつともないの。(間) 朝、顔を洗ふ時、どういふ風にするか知つて……。 (溜息) それから、服を着る時……。手を前後左右に振り廻すの……。洋服を着るなら、洋服の着方ぐらゐる覚えればいいのに、そのさまつたら、見てゐられないの。

朋子 さも憎らしさうね。さう言つたもんぢやないわ。變に氣取つてる男なんかよりは、さつぱりしていいぢやないの。

恒子 ところが、さつぱりなんかしてないの。なぜつて言へば、その氣取らないところを氣取つてるわけなの。わかる？ おれは氣取つてなんかかゝないぞつていふところを見せるつもりなんでせう。それが、もう一種の氣取りだつていふことを知らずにゐるの。だから、すること言ふことに、いちいちこだはりがあつて、そばにゐると、ぢれつたくなるの。ふんて言ひたくなるの。

朋子

さうか知ら……。

恒子

さうさう、式ん時だつてわかるわ。どう、あの、なんでもないやうな風のしかたは……

……。さもこんなことは面倒臭いつていふやうな様子をして、そのくせ、あれで、固くなつてるのよ。ほら、よくしらばくれた顔をするぢやないの。あれが、てれかくしよ。——へえ、僕があの子と結婚するんですか。へえ、僕がこのお酒を飲むんですか。へえ、一緒に旅行をするんですか。まるでさういふ顔よ、あの顔は……。第一、停車場へ行くまで、行先を決めないなんて、あんまり人を馬鹿にしてるわ。母さんなんか、すむぶん氣を揉んでいらしたわ。いくど母さんが訊いても、——さあ、まだ決めてありませんがね。まあ、行き當りばつたり、汽車の止つた處へ降りるんですな。どこつて別段見たい處があるわけぢやなし……。ハハハハ……。かうなんでせう。母さまはむろんだけど、赤羽の伯父さまなんか、横を向いて苦い顔をしていらしたわ。それも氣取りよ。無頓着振るのよ。却つて可らしいのに……。

朋子 あたしも、それは覺えてる。さう言へば、變な人だと思つた。

恒子 それから、まだあるわ。東京驛で、みんな送つて来て下すつたでせう、あん時、姉さまが、汽車の中へ花束を持つて来て、二人に下すつたでせう。それ見て、なんて言つたか覺えてらつしやる。

朋子

(キツパリ) ええ。——これどうするんですか……。そして、——厄介だなあ、持

ちものになつて……どうせすぐ萎れちまふんでせうつて……。

恒子 ね。わかるでせう、バツが悪いのを誤魔化さうと思つて、わざと素氣そつきないことを言ふのね。それが、氣が利いてればいいけれど、それだけの頭はなし、つい、人の氣を悪くするやうなことを言つてしまふのね。

朋子 困つた人ね。しにくいわね。

恒子 輕蔑したくなるわ。可哀さうになるのが本當かも知れないけれど……。

朋子 さう言つちまつちや、また、なんだけれど……。

恒子 いいえ、いいのよ、姉さま、あたしはもう決心してるんだから……。

朋子 決心つて……？

恒子 だから、あたし、歸るのよ、うちへ……。

長い沈黙。

朋子 それや、あなた、思ひ切りが早すぎてよ。そんなもんぢやないわ。(間)男つていふものは……。

恒子 もう澤山、その御説教なら……。男つていふものはどうなの……。誰がさうきめた

の。姉さまも、やつぱりさうなのね。ぢや、こんなこと、御相談するんぢやなかつたわ。

朋子 恒ちやん。まあ、もつと考へてみませうよ。それや、恒ちやんの想像してたやうなものぢやなかつたかも知れないけれど、今聞いた、ただそれだけの話なら、そんなに、あなたが思つてるほど、重大なことぢやなくつてよ。第一、あの人が、あなたを愛してゐないつていふ證據にはならないぢやありませんか。

恒子 それがどうなの、愛されてゐるか、ゐないかは第二の問題よ。

朋子 え？

恒子 第一の問題は、愛されて幸福な相手かどうかつていふことだわ。

朋子 だつて、恒ちやん、それはもう……。

恒子 初めからわかつてたつて言ふんでせう。ええ、わかつてたわ。それが間違つてたらどうするの。間違つてなくつても、望んでゐたことが駄目だつたらどうするの。姉さまは幸福だから、あたしのことなんかおわかりにならないんだわ(泣く)

沈黙。

朋子 (キツとなり) 何言ふの、恒ちやん。こんなことを、あたしの口から言ふのはいやだけ

れど、一番あなたのことを心配してるのはあたしよ。だからこそ、かうして、何處よりもあたしの處へ相談に来てくれたんでせう。だから、相談に乗るわよ。いろいろなことを言つたり言はれたりしてみませうよ。怒つちや駄目よ、すぐ、あなたのやうに……

恒子 姉さま、あたし、どうしても、このまま歸るのはいやよ。これだけとは思つて、言はずにゐたけれど、姉さまがさうおつしやるなら、みんな言つてしまふわ。きつとびつくりなさるわ。あたしも、これだけは我慢ができないの。

朋子 ちよつと待つて頂戴。落ちついてものをおつしやいよ。言つてしまつたら、もう取り返しつかないことがあるわよ。もちろん、姉さんに言つたからつて、それをまた誰に言ふつてわけぢやないけれど、あたしは、ただ、あなたが、自分の矜りを自分で傷つけるやうなことをしないやうに、それだけのことを言つて置きたいの。あなたに、今、冷静になれつて言ふのは無理かも知れないけれど、あたしだけは、せめて、度を失はないでゐなくちやならないでせう。あなたの爲めによ。さ、しつかりして頂戴。さうして、出来るだけ感情を交へないで、事實だけを聞かして頂戴。もし言つていいことなら……。

長い沈黙。

恒子 さうおつしやられると、言へなくなるわ。

朋子 やつぱり、言はない方がいいんでせう。

恒子 だつて、それを言はずにゐれば、姉さまに、あたしの氣持がわかつて頂けないんですもの。それに……言つたつてかまはないわ。どうせ圓く治まることなんかありつこないんですもの……。それはね、かうなの。

朋子 (起ち上り) すぐ來るわ。あなた、お腹がすいてやしない。

恒子 いいえ。

朋子 でも、兎に角、あり合せでね。

恒子 いいのよ、姉さま……。あたし、これから、大久保へ歸るから……。

朋子 大久保へ……。どうして……。まあ、もう少しあたしの言ふことを聴いてから、ね。

(出で去る)

長い間。

家政婦 (茶を運んで來る) いらつしやいませ。

恒子 (黙つて會釋する)

家政婦　ちつとも存じませんで……(茶を進める)　もうお歸りになつたんでございますか。

恒子　ええ。

(家政婦去る)

讓　(現る)　やあ、失敬。もう歸つて來たんですか。早いぢやありませんか。

恒子　(挨拶に困つて)　東京が戀しくなつたもんですから……。

讓　新婚旅行なんでものも、これでだんだん形式的になつて行くんですね。まあ、言つてみれば、人がするからするつていふ程度の興味しかありませんね。しかし、それは、あとから感じることで、それをやつてる最中は、いささか夢中で、といふのが本當かも知れないな。

朋子　(現る)　何を獨りで喋つてらつしやるの。あのね、あなた……(と、夫の耳に口を寄せるやうにして、小聲で何か言ふ)

讓　(快活に)　さうか。それはお邪魔をした。ぢや、まあ、ごゆつくり……(立ち上る)　しかし、飯は一緒に食ふんだらう。

朋子　ええ、むろんよ。

恒子　あら、兄さま、よろしいんですのに……。姉さま、ほんとに、兄さま、いらしつても

かまはないことよ。その方が却つていいわ。兄さまにも、一緒に聞いて頂くわ。そして、御意見を伺はせて頂くわ。

朋子　さう……。あたしは、どうでもいいけれど……(二人の顔を見比べて)　ぢや、兄さまにもゐて頂きますせう。どうせ、いざつていふ場合には、相談に乗つて頂かなくつちやならないんだから……。

讓　(わざと落ち着きを見せて)　何事です、いつたい、そんなに改まつて……。 (腰をおろす)

朋子　どう、あらましのことを先に言つといたら……?

恒子　……。

朋子　でも、ちよつと、一口には言ひにくいわね。何んて言つたらいいか知ら……。

讓　簡単に言へばわかるよ。何か間違ひでも起つたのかい。

朋子　(恒子の方を見ながら)　間違ひつていふわけぢやないんですけれど……。そいぢや、あたしから言ふわ。ね、いいでせう。かうなの。やつぱり、今度の問題なの。(間)　恒子の話では、どうもうまく行かないらしいんですの。それが、取り立てて、かういふことがあつたつていふよりも、性格的に合はないんでせうね。第一、若い女の氣持が、ちつともわからな

い人らしいわね。

譲 それや、しかし、お前……。

朋子 ええ、それを、今、あたしも、恒子に言つたんですけど……まさか、こんなでもあ
るまいと思つてたらしいのね。母さまなんかも、蔭で心配してたんですし、あたしもそれと
なく、恒子に注意したことがあつたくらゐですからね。でも、程度の問題になると、これや
ね、やつぱり、見損ひ……殊に、恒ちやんの前でなんだけれど、さう悪い方にばかり取れな
いつていふ場合もあるし……。一概に恒子を責めるわけにも行かないと思ふんですけど……
……。あたしにも幾分の責任はあると思つてゐるんですわ。

恒子 そんなことありませんわ。姉さまはなにも……。

朋子 まあ、聴いてらつしやい。それで、恒子は、今になつてこんなことを言ひ出すのは不
嗜みのやうだけれど、將來のことを、もう一度考へ直してみたいつて言ふんですの。

譲 もつと具體的な説明を聴かうぢやないか。

恒子 でも……（姉の顔を見る）

朋子 いろんなことが重なつてゐるらしいんですけれどね、それが……。さうね、どういふ

ことから言つたらいいか知ら……。ねえ、恒ちやん、あなた、一番いやだと思つたことはな
に？ 一番辛抱ができないと思つたこと……。

恒子 それが、さつきお話ししようと思つてたことなの。それを言はなければわからないか
ら、やつぱり言ふわ。（間）それが昨夜なの。（間）宿屋で、偶然、あの人のお友達つていふ
人に遇つたのよ。今迄聞いたこともない人なの、それが、晩方から来て、一緒にお酒を飲み
出したの。それだけなら、まだいいの。二人共酔拂つて、何時までも大きな聲で喋つてるん
でせう。あたし、あんまりだと思つたから、お隣の方の御迷惑になりやしないかつて、さう
言つてみたのよ。さうしたら、「餘計な心配をするなッ」て呶鳴るの。さうして、いきなり、
何處かへ行かうつて、二人で出て行つたきり、いつまで待つても歸つて來ないの。一晚中ま
んじりもしないで、あたし、待つてたわ。夜が明けてからよ、變な顔して歸つて來るの。
さうして、あたしの顔を見て、にやにや笑つてるの。

長い沈黙。

朋子は、これも眼に涙を溜めて夫の顔を見てゐる。

恒子 それでも、あたし、しばらくは黙つてゐたの。ただ、もう東京へ歸りませうつて、お

となしく言ひ出して見たのよ。すると、怒つたのかつて聞くの。いいえ、ただ、あたし、東京へ歸りたくまりました、なんなら、一人で歸していただきます、さう言つてやつたの。

沈黙。

恒子 —— 歸りたけれや歸らう。しかし、あんなことはないんだよ。つき合ひなんだからねえつて、さも、あたり前のやうに言ふの。あたしは、あの人がどんなにあやまつたつて、こればかりは許せないと思つてゐるんでせう。そこへもつて来て、あんまりな言ひ草だから、—— あなたは、あたくしに恥かしいとお思ひになりませんか、思ひきつて言つたの。(問) さうすると、おれは何も後ろ暗いことをした覚えはない。それをお前が疑ふのは、お前の勝手だ、かうなの。だから、あたしは、—— いいえ、疑ふ疑はないぢやありません。ああいふなさり方は、あたくしを侮辱なさるばかりでなく、あなた御自身を侮辱なさるものですつて、まあ、さうむつかしくは言はなかつたけれど、さういふ意味のことを言つたつもりなの。そんな時は、もう、聲が出なかつたかもしれないわ。(問) だつて、胸が一杯なんですよ。

長い沈黙。

朋子 それだけ……言ふことは。

恒子 (うなづく)

朋子 あなた、どうお考へになつて……?

讓 少し亂暴だね。

朋子 少しどころぢやありませんわ。それから、あの人はどうしたの。

恒子 どうもしないわ。それから、ひと口も口を利かないの。東京驛へ着くまで、二人とも、黙つたままよ……。ただ、うちへ寄つて来るつて、さう言つて別れたきり……。

朋子 ぢや、あなたが、ここへ來たことは知らないのね。

恒子 どうせ察してるでせう。

讓 しかしね、恒ちゃん、男つていふものは、……。

朋子 そのお説教なら、もう澤山……。

讓 どうして……。

朋子 あたしが、さつき、恒子から言はれたんですの。なるほど、さういふことがあつたのでは、男つて言ふものはぐらゐぢや承知ができない筈ね。(問) でも、まあ、兄さまの御意

見を伺はうぢやありませんか。

讓 (少し固くなつて) さう聞き直られても困るが、僕は、何も、男の辯護をするんぢやない。しかし、しかしだね、さういふ問題は、もう少し、動機から穿鑿してかからないと、表面に現れた事實だけでは、あんまり厳しい批評はできないものなんだ。

朋子 だつて、あなた……。

讓 まあ、待て。それでだね。僕が、一つ、先生に代つて、言ひ開きを試みようか。(間)
——實はだね、あの時はだ、その友達に會つてさ、やあ、お楽しみとかなんとか言はれてだね、少しテレ氣味になつてゐたんだ。友達に會つても、ろくに話もしないで、始終細君のそばばかりにくつついてゐたなどと、あの男のことだから、みんなに言ひふらさないものでもない。少し露骨だが、まあ、夜なんかでもだね。早くから二人つきりになりたがつてなどと、どうせ悪口を言ふに違ひないとね。それも少しいまいましい。よし、やつにさつぱりしたところを見せてやらう。それには、晩飯でも一緒にゆつくり食つて、酒でも飲んで……細君ばかりに興味をもつてゐるわけぢやない、といふところを見せる爲めには……。

恒子 (何か言はうとする)

讓 まあ、お聴きなさい。そこは頗る細君を信用し、また細君の信頼を利用して、どんどん事を運んだ。始めてみると、細君は、あまり御機嫌がよくない。そこで、涙を吞んでですね、細君に一喝を食はせた。えらいぞ！ と友達の間は叫んだ。あたり前よ。と鼻をうごめかしながら、實は眼つきで細君に詫びたのだが、一向通じない。

朋子 およしになつたら、そんな戲談口は……。

讓 戲談は言つてやしない。ねえ、恒ちやん、僕の話は、決して不真面目ぢやないでせう。調子でものを判断しちやいかんよ。どうせ理窟で解決のつく問題ぢやないんだ。早く言へば、その時の氣分がわかればいいんだ。さうでせう、恒ちやん。

恒子 (うつむいたままだゐる)

讓 愚圖愚圖してゐると、九俣の功を一簣にかく懼れがある。これは一層、この場を立ち退いた方が安全だ。なに、それも後でわかる話だ。よく話せばわかる。話さないでも、考へればわかってくれる筈だ。聰明な彼女のことだから……。そこで、大いに前後不覺を装つて、細君の前から姿を消したんです。もうそのくらゐでいい筈なんだが、相手の男が、どうもうるさい男で、なんだ、もう歸るのか、そんなに疲しいのか、とかなんとか言ひ出すので、

どうせここまで来たならと、悪く度胸を据ゑてしまつたんですね。さて、翌朝、友達をやうやく納得させて、やれやれといふ譯で、細君のそばに飛んで歸ると、案じた通り、ぼつねんと、彼女は、眼をはらして待つてゐる。その時、西洋の男なら、——おお、わが愛する妻よ、いとしき者よ、さぞびつくりしただらう、悲しかつただらう、腹が立つただらう。わたしがお前を大事にしてゐるといふ證據には……などと、いろいろ優しさうな言葉を搜すんですが、日本の男は、それだけの心持ちを、ただその、なんでしたつけ……あ、そのにやにやで現し得るんです。西洋の女なら、又そこで——お前さんはどんなにわたしを悲しませたでせう。もうこれから、あんなことをしてはなりません。もしまた、これが最後でなかつたら、わたしは、どんな男のところへ走つて行くかわかりませんよ、てなことを言つて、亭主を脅迫する處ですが、日本の女は、そこは心得たもので、顔を襟へうづめたまま、黙つて、疊のへりを見つめてゐる。それが、どれほど亭主を恥ぢ入らせることせう。口を開いたところで、まあ、東京へ歸りませうぐらゐな、極めて婉曲なね……。

朋子　あなたは、今日はよくそんなにお喋りがおできになるのね。もういい加減になさらな
い？　たいがい解りましたわ。ねえ、恒ちゃん、兄さまの、その先はもう伺はなくなつて、

わかるわね。

恒子　（うなづく）

譲　どうわかつたの。そこで切られては皮肉のやうに聞えるが、さうぢやないんだよ。僕の言はうとしてゐることはですね。つまり、あそこまでは、無事なんだ。問題はない。面倒になつたのは、ただその先へ行つてからだ。——怒つたの。いいえ……云々からです。しかしながら、それもですね、僕の解釋に従へば、ただ、一時の、感情のもつれ、といふか、謂はばお互にすね合つてゐるだけの話ですな。

朋子　（ムキになり）今おつしやつたことは、あなた、ほんたうにさう考へていらつしやることなの。

譲　といふと、どういふことになるかね。僕は、さつきお前から、ぢやない、恒ちゃんから聞いた話に基づいてだね、最も常識的な考へ方をしてきたまでだ。それでだね、もし恒ちゃん、その時の事情やなにかを綜合してみたら、今僕が言つたやうなわけに違ひないと思へばだね、それはそれで、大した問題にしくつてもいいぢやないか。ただ、どういふ風にして、これから仲直りをするかといふ問題が残つてゐるわけだが……それは、至極平凡な問題

だ。

朋子 だからそんなことを御相談してゐるんぢやありませんわ。恒ちゃん、あなた、どう思ふ、今のお話……。

恒子 (遠慮深く) 姉さま、あたし、思つたことを言つていいこと？

朋子 ええ、ようござんすとも……。(さう言つて夫の方を見る)

譲 僕には遠慮はいりませんよ。言ひ給へ、しかし、腹がすいて來たな。

朋子 御飯はもういいんですけど、ちよつと、まあ、切りをつけてからにしませうね。その方がよくはありません？

譲 よからう。さ、恒ちゃんは、どういふの……。

恒子 今のお話ね、あれが男の方に取つては、立派な……言ひぬけかも知れませんが、あたしたち女、といふと大袈裟ね、あたしだけの問題にしてもようござんすわ。あたしにしてみれば、それはちつとも、ありがたいことぢやありませんわ。男の、さういふ見榮は——女を踏みつけにして平氣でゐるといふ誇りなんかは、どつちみち、尊敬の出來る習慣ぢやないと思ひますの。

朋子 それやさうね。

恒子 ですから、あたし、やつぱり、決心をしますわ。

譲 決心はまあ、もつと後でもできますよ。ぢや、どういふ理由があるにしても、それは許されなかつていふわけですわ。

恒子 許す許さないぢやありませんわ。生活態度の違いなんですもの……。

朋子 さうね、全く……。

恒子 それが、そのことだけに現はれてゐるんぢやないんですもの、その違ひが……。すること、なすこと、いちいち、あたしには見てゐられないんですの……。

譲 それは、何時からです。

恒子 その日からですわ、式を擧げてから、……。

譲 急にですか。

恒子 急に目立つて來ましたわ。

朋子 それは、向うの態度が急に變つたといふよりも、恒ちゃん、あなたの氣持ちに、その時から、ある句切りができたからぢやないの。さういふことはあつてよ。さあ、これからこ



の人と一緒に新しい生活をはじめると、さう思ふと、その人を、また新しい眼で見直つていふ風になるんぢやなくつて。その時、はじめて、夫としての、いろいろな細かい心づかひなんか、いちいち、自分の氣持を明るくしたり、暗くしたりするんだと思ふわ。それは、まあ、あたしの経験……（と言ひながら、夫の方に軽く笑ひかける）

譲 （しきりに、うなづいて見せる。甚だ嚴肅な顔をしてゐる）

恒子 それもあるでせうね。

譲 それは、しかし、お互ひだよ。男の方から言つても、それと同じことが言へるんだ。それや、女ほど、そのことばかり氣にしてゐないだらうけれどね……。結婚してみると、やつぱりさうだつたのかと思ふことや、こんなだとは思はなかつたと感じる事が、男の眼にだつて、さらに映るんだ。

朋子 （ちよつとテレテ） つまり幻滅ね。でも、女の方は、なんと言つても、慎しみ深いし……。

譲 どうだか……。

朋子 男の生活に自分を従はせるといふ努力だけは……。

譲 それやすさ、表面だけはね……。

朋子 いいえ、その爲めに、いろいろな犠牲まで拂つてゐます。

譲 どんな犠牲……。

朋子 夫の趣味に合はなければ、自分の趣味も犠牲にしてゐます。

譲 書樂のことを言ふんだらう。

朋子 いいえ、そればかりぢやありません。

譲 そればかりでなければ、なんだ。ああ、さうか、あのことを言ふのか（笑ひたさうな、皮

肉な眼つきをして天井を見上げる）

朋子 なんですの。なんのことですの。

譲 人に訊く奴があるか。

朋子 （笑ひながら） あれは、昔のことですわ。兎に角、あたしにさういふことをおつしやる資格は、あなたにはありませんわ。恒子の前で、あんまり變なことをおつしやらないで下さい。

恒子 姉さま……。

朋子 いいのよ、兄さまは、すぐあれなの、誰の前でも……。

譲 (笑ひながら) ぢや、恒ちやんの旦那さんとおんなじだ?

恒子 うそよ、兄さまは好い方よ。第一、新婚旅行で、姉さまの寫眞を八十枚もお撮りになつた方ですもの……。

譲 よく覚えてるなあ。恒ちやんの旦那さんは撮らなかつたかい。

恒子 寫眞機なんて、洒落たものを持つてるもんですか。ステッキだつて持つてやしませんわ。

朋子 あら、ステッキを持つて歩かないの。ぢや、何を持つて歩くの……? 蝙蝠傘……?

恒子 それと、鞆よ。両手で、大きな鞆を提げて歩くの。赤帽なんか持たせないの。だつて、自分で持つてゐるつていふんですもの……。

譲 力は強いんだね。

恒子 (曖昧に) ええ。汽車から降りる時なんか、人の荷物までおろしてやるのよ。

朋子 さういふ處は、なかなか親切ぢやないの。

恒子 それでゐて、あたしが乗つたり降りたりする時は、手も貸してくれないの。自分一人、どんだん先へ行つちまふの。

朋子 東京驛から、ずつと眠り通しなんですつて……。

譲 だれ?

朋子 あの人がですよ。恒子なんかにはかまはずに、グウグウ、高聲をかいてるんですつて……。口をあけて……。

譲 鼻が悪いんぢやない。

朋子 行儀が悪いんですよ。宿屋なんかにも、ずるぶん、そばでハラハラするやうなことがあるんですつて……。この人の前で、女中に戯談を言ふことなんか平氣らしいのね。御飯のたべ方だつて、それや下品なんですつて。まるで紳士らしいところがないつていふの (夫の顔を見つめる)

譲 そんなことは、まあいいさ (妻の視線を避け) 別に大したことぢやない。

朋子 一番見てていやなのは、何でも、わざとつまらなさうな顔をする事なんですつて……。いくら景色がよくつても、景色がいいつていふではなし、何か食べれば、きつと不味さうにして食べるし、お土産を買ふつて言へば、荷物になるつて變な顔をするし、それや張合ひがないらしいのね。

讓

(自分のことを言つてゐるのではないかといふやうな、くすぐつたい微笑)

朋子 その上、無精なんですつて……。お湯から上つても、髪は解かず……。(夫の櫛をあててない髪を見上げ) 爪がのびたらのびたまま……。 (讓、それとなく、自分の爪を見る) 少し散歩しませうつて言へば、海ならここに寝ころんでたつて見える、散歩なんて草臥れるばかりだ、かうなんですつて……。

讓

(いよいよ、自分に思ひ當ることがあるらしく、小鼻をふくらませて、恒子の方を見る)

恒子 (これはまた、姉の驚くべき想像力にやや不審を抱くと同時に、いくらか、尊敬をさへ拂ひたい氣持になる)

朋子 (益々雄辯に) そのくせ、つまらないところで威張つて見せるのね……。蒲郡つて何縣だつて訊くから、そんなわかりきつたことと思つて、返事をせずにはゐたんですつて……。さうしたら、いい氣になつて、日本地圖を書いて何處の處か圓をつけて見ろつて、學校の先生みたいなことを言ふんですつて……。出来ないんだと思つて、あまりしつこく言ふから、さつさと日本地圖を書いてやつたんですつて……。さうしたら、本州だけしか書いてないのに、なんだ、それや茄子ナスかつて……。

恒子

胡瓜よ、姉さま。

朋子

さうさう。胡瓜かつて訊くんですつて……。

讓

なるほどね(笑ふ)

朋子

ずいぶん失禮ね。(問) それやこれや、ちつとも新婚らしい氣持になれないんでせう、あんまり殺風景で……。はじめからそれちや、少し可哀さうね。

讓

それで、お前は、どう思ふんだい。恒ちやんに賛成なのか。(問) さう簡單には行くまい。(問) 第一、お前だつたらどうする。

朋子

恒子とあたしとは違ひますよ。自分の立場からでは判断はできませんわ。恒子は、あたしなんかよりは理想も高いんですし……。

恒子

そんなことありませんわ。でもこんなことを御相談するつていふのが間違つてゐるのかもしれないわね。自分では迷つてなんかゐないつもりなんですけれど、あとで、なぜ一言あたしたちの耳に入れなかつたつて、さうおつしやられるにきまつてると思つたもんですから、兎に角、お話してみたいんです。でも、いろいろ参考になりましたわ。

朋子

ちや、やつぱり別れるつもり。

恒子 ええ。

譲 しかし、恒ちやん、それ以上の幸福が、先に待つてゐると思つたら間違ひだよ。もう一度結婚するやうなことがあるとしてだね、その結婚が、より不幸な結婚かもしれないといふことだけは考へて置く必要があるね。そんな結婚ならしないといふかもしれないが、結婚といふものは、今度でもわかる通り、實際してみないとわからないものだ。さうでせう。尤も、あてにならない幸福を探り當てるために、自分の運命を切り開いて行く決心なら別だ。倒れては起き、倒れては起き、さうして、たうとう行き着く處へ行きつかないで力が盡きる、さういふ生活をすらす義のある生活だと思へば、これや、また別だ。ね。理想的の夫を見つけ出すまで、つぎつぎと、男から男に遷つて行くつていふやうなことは、これやできないでせう。果して、恒ちやんが、これならと思ふやうな男に出會ふチャンスが、確實にありますか。あるとは言へませんね。さうすると、もしチャンスが無い場合にどうするか、そのことも一應考へて置かなければなりませんね。離婚といふ問題は、これやなかなかむづかしい。(間) だつて、やつぱり離婚でせう、結婚してゐるんだから……。

朋子 さうね。たつた一週間やそこらだけだ……。

譲 それは、一緒にゐる期間が短かければ、それだけ、まあ、損失は少いわけです。しかし、一番大事なものは失つてゐるんだ。

朋子 (痛ましげに恒子の方を見る)

譲 月並な議論だけれど、普通の貞操觀念に従へば、あんたはもう、處女として夫を選択する資格はないんですからね。それで、假令、やや理想的な再婚ができたとしてもです、新しい夫婦關係は、全く純粹なもんぢやない。何か、こだはりがあるに違ひない。二人が愛し合へば愛し合ふだけ、そのこだはりが目立つて來るものなんです。さういふ關係を、それや、雙方の努力によつて、非常に美しいものにすることもできる、しかし、それは先づ例外だ、と言つていいですね。

恒子 あたくし、別に再婚しようとも思つてゐませんし、今別れば、明日から幸福に生活ができるとも思つてゐませんけれど、いやいやながら、ああいふ人と一緒にゐるといふことが、全く無意味に思へてならないんです。さういふ夫を選んだ輕率さは、別の方法で罰せられてもいいと思ふんです。例へば、一生獨身で暮すといふやうなことなら、甘んじて忍べるだらうと思ひますわ。それだけの覺悟があるなら、今ひと思ひに別れてしまつた方が、

却つて自分に忠實ぢやないかと思ふんですけれど……。

讓 自分にだけ忠實でも仕方がないでせう。

朋子 さうよ。自分のことだけ考へてちや駄目よ。

恒子 ぢや、誰のことを考へるの。

朋子 みんなのこと……。第一に、母さまのことよ。どんなに心配なさるか知れないわ。

讓 いや、それより第一に、旦那さんのこと考へてみようぢやありませんか。あなたは、先生を取り返しのつかない不幸に陥れるかもわからないんですよ。さういふ時はどうします。平氣でをられますか。向うはどうなつてもかまはないんですか。

恒子 そんなことおつしやつたつて、兄さま、あの人は、あたくしのことを考へてはくれな
いんですもの……。それよりも、二人の幸福を、平氣で踏み躪つてゐるんですもの……。二
人の生活を楽しいものにするつていふ希望が、あの人のどこにも現れてゐないんですもの……。
さうしてみれば、あたくしの方ばかり、ああもしよう、かうもしよう、つて骨を折つて
みても無駄ぢやありません？

讓 無駄かどうか、まだわかりませんよ、一週間やそこらぢや……。

恒子 (涙聲で) 兄さまは、飽くまでも、あたくしに、忍従生活をおすすめになるのね。二人
が力をあはせてすべきことを、あたくし一人にしろとおつしやるのね。姉さま、あたくしは

いやよ、それは……。(涙を拭く)

沈黙。

それや、向うにする意志はあつても、力が足らなくて、それができないなら、一人でやつて
みますわ。どこまでもやつてみますわ。しかし、する力があつて、しないのなら……する意
志がないのなら、あたくし、どうしても、そんな元氣は出ませんわ……。さうする興味もあり
ませんわ。いやです、いやです、死んでもいやです……。(聲を忍んで泣く)

朋子 (貫ひ泣きをしながら、聲だけは快活に) しつかりなさいよ、泣いてなんかゐる時ぢやな
くてよ。困るわね、かういふのは……。別段、あなたを不幸にしようと思つてるわけぢや、
もちろんないでせうし、どうかすると、自分はあたり前のつもりでやつてるのが、あなた
の氣に入らない……。まあ、それや、あなただけでなく、どんな女の氣に入る筈もないでせう
けれどね——氣に入らないばかりでなく、それが、あなたの生活まで暗くするつてんでせ
う。ありさうなことね。だけど、向うにわる氣はないとすれば、どうでせう、ぼつぼつ、氣

長に、直してみることはできないか知ら……。

恒子 性格だから駄目よ……。

朋子 さうね、ただ無作法つていふのと違ふんだから……。

讓 やつぱり程度の問題だね。男つていふものは、多少、さういふ缺點をもつてゐるよ、女から見ればね。性格とかなんとか言つたところで、結局、習慣さ。無責任なこととは言へないが、恒ちやんがもし、男の我儘を許さないといふ主義で行くなら、男の従属物たる地位を深く棄てることだ。さうして、文字通り愛し合ふ爲めには、文字通り對等の能力を示すべきです。

朋子 對等の能力つて言ひますと、經濟的に獨立することをおつしやるんでせう。

讓 經濟的とは限りません。例へば僕が學校の教師をする。(妻を見返り)こいつが商店の事務員になる。

(朋子と恒子とは顔を見合はせる)

朋子 (心外らしく)こいつとはなに……？

讓 親密な關係を表はす呼び方だよ。併し、それで決して、女が獨立してゐるとは言へませ

ん。こいつは、何かつていふと、僕の處へ來て、ねえ、あなた、どうしませう……。

朋子 うそばつかし……。

讓 うそなもんか。ねえ、これぢや對等の能力とは言へますまい。

朋子 でも、お互にさういふ風にすればいいんですわ。どんなことでも相談し合つて……。

讓 ——ねえ、あなた、どうしませう……。

朋子 もう澤山ですよ。

讓 うるさい話ですな、どうも……。恒子さん、兎に角、今日はお歸んなさい、旦那さんのそばへ……。さうして、知らん顔をして芝居をおねだりなさい。僕達もお伴をしますつて……。

朋子 (陽氣に)それがいいわ。(しんみり)ね、さうなさい。

恒子 (その氣持に乗りかねて、何か遠くのものを見つめてゐる)

讓 (靜かに立ち上り)僕は、ちよつと、食事までに、頭を直して來ます。序に爪も剪つて來ます。マダム・ツネコ・サイトウの陪食を仰せつかつてゐるんだから……。

恒子 (姉の顔をちらと見て、軽く笑ひかけるが急に眞顔になり)姉さま、あたし、今日は歸して

頂くわ。折角ですけれど、なんだか落ちつかなくて……。

朋子 歸るつて、どつちへ……！

恒子 (低く) 大久保……。

朋子 (これも低く) やつぱり……。

長い沈黙。

恒子 ぢや、兄さま(起ち上り) 御免遊ばせ。つまらない事をお耳に入れて、ほんとに……。

讓 もつとよく考へて御覽なさい。(妻に) お前、なんなら、送つて行かないか。

朋子 ええ。ぢや、どう、恒ちやん、今から向うへ行つたつて、どうせ……。

恒子 ええ、でもいいのよ、心配しないで頂戴……。ぢや、さよなら……。また伺はせて頂

くわ、明日にでも……。

朋子 さう。でも、ちよつと送つて行くから待つて頂戴。

恒子 いいのよ、姉さま、ほんとに……大丈夫よ……。

一同が座を起つた時、驟雨沛然として到る。

三人は、無言のまま、窓越しに外を見つめる。

恒子。大きな溜息をつく、

朋子 なんていふお天気でせう。

讓 すぐ止むだらう。もう少し休んでいらつしやい。

長い沈黙。

—幕。

村で一番の栗の木
(五場)

亮太郎

あや子

その他無言の人物数人

第一場

山間の小驛——待合室

眞夏の拂曉。

發車の直後といふ氣配。

二三の旅客に交つて、都會のものらしい夫婦連れが、改札口の方から現れる。一隅を選んでそこに手荷物を置き、汗を拭ひ、左右を顧み、やがて、女が先に、男がそれに續いて腰を下るす。

他の旅客は、待合室を通り過ぎるだけである。

男は出來合ひらしい白の洋服、女は現代風のかなり整つた身じまひ。——手荷物は、服装の割に野暮な信玄袋と行李鞆、それに、中型のシューツケース。

亮太郎 疲れたらう。

あや子 やつぱり眠れなかつたわ。どつかに顔洗ふところないか知ら……。

亮太郎 朝飯を食へば、前の宿屋で洗へるけれど……まだ早すぎるだらう。それとも輕便を一つ待つて、六時のに乗つたつていいや。

あや子 六時のだと、何時に着くの。

亮太郎 七、八、九、まあ、九時だね。

あや子 それでもいいわね。折角買ったお辨當が無駄になるけど……。

亮太郎 お土産にちやうどいいよ。

あや子 お辨當のお土産つて、あるか知ら……。(間) あたし、さうする。

亮太郎 待てよ、ちよつと、見て來よう、もう起きてるかどうか(出て行く)

あや子 (待つてゐる間、信玄袋の上に兩腕を托し、それに額を當ててゐる)

亮太郎 (首を振りながら入つて來る) 駄目。駄目だ。あと一時間かかるつて……。それぢや六

時のに間に合はない。

あや子 その次は何時?

亮太郎 (時間表を見ながら) 六時の次が、七時三十分……その次が九時三十分……。

あや子 ぢやいいわ。まだおなかはすいてないし、それに、顔なんかどうだつていいんでせう。見る人なんかのやしないわね。

亮太郎 見る人はゐるよ。みんな見るよ。それこそ、通る奴通る奴、みんな振り返つて見よ。君のやうな女は、開闢以來、あの村に現れた例しはないんだから……。

あや子 いやな方……。でも、お化粧なんか氣をつけて見る人はないでせう。これでいいのよ。

亮太郎 でも氣持がわるかないかい。

あや子 いいの、面倒臭いわ。

亮太郎 そんならいいさ。輕便一時間半、馬車一時間、谷を下り、坂を上ること二十分、橋を渡ること二度、梯子段十七段、門から玄關までさつと十間、廊下二十歩、それでやつと座敷へ通ると、おやちとお袋の口上が短く見積つて滔々十五分、着物を着替へて風呂へはひり、昨夜は寝てないからと言つて一休みするまで、なかなか暇がかかるぜ。

あや子 いくらなんだつて、着く早々寝られやしないわ。お母さんは優しい方？

亮太郎 だから不斷さう言つてるぢやないか——お袋は、僕の言ふことならなんでも聴く。

恐らくお嫁さんにも同様だらう。うちには女の子がゐないから、きつと珍しがるよ。甘えてやり給へ。

あや子 甘えられるお母さんだといいわね。(間) ねむいのよ、あたし……。 (また信玄袋の上に突つ伏す)

亮太郎 寝てろよ。まだ三十分ばかりある。(間) 恐ろしい霧だ。

間。

あや子 あれ、霧なの。さうだわ、變ね、あたし、さつきから、なぜ煙みたいなのが一杯あるのかと思つてたの。やつぱり氣候のせむね。

亮太郎 氣候のせむさ。海拔二千九百尺、これからまだ登りになるんだ。君は白樺といふ木を見たことはないだらう。それから、落葉松、えぞ松といふやつ……。 (間) 眠れるかい。

あや子 ええ。

亮太郎 話はやめようか。

あや子 いいのよ。聴きながら眠るから……。

亮太郎 洒落たこと言つてらあ……。君に、栗の木のこと話したか知ら……。

あや子 なに？

亮太郎 栗の木さ……。屋敷にある大きな栗の木さ。

あや子 ええ。

亮太郎 話したかい。

あや子 ええ。

亮太郎 なんて話したつけな。

あや子 村で一番の栗の木だつて……。

亮太郎 あれや、全く見ものだよ。二抱へある栗の木つていふのは珍しいだらう。栗が落ちる頃は、毎朝、うちぢゆうの女が出て拾ふんだが、朝の間だけでは拾ひきれないほどなんだ。

あや子 ……。

亮太郎 この秋は、東京へ送らせることにしよう。獨りぢや、栗を焼いて食ふ氣にもならな
いからね……。〔間〕 だけど、家ん中が穢いのをびつくりしちや駄目だよ。田舎の家なんて

いふものは、古いのを自慢にしてるんだからね。煤けてるほど値打があると思つてるんだ。その代り、風が吹いたつてぐらぐらするやうなことはない。

あや子 もうあと幾分？

亮太郎 三十分。

あや子 まだ三十分？ さつきとおんなじね。

亮太郎 おんなじだ。

あや子 時計が止つてやしない？

亮太郎 止つてやしないよ。

あや子 ……。

亮太郎 輕便まで誰か迎へに來てるかも知れないよ。弟が來てるか、おやぢが來てるか。

あや子 お父さん、そんなにお達者なの。

亮太郎 達者もなにも、急ぐ時でなきや、馬車なんかへ乗りやしないよ。

あや子 お歩きになるの、馬車で一時間の處を……？

亮太郎 あたり前さ。田舎者つて、そんなものだよ。畑だつて、自分でするんだよ。

あや子 あら……。だつて、人を使つていらつしやるんでせう。

亮太郎 使つてるさ。使ふもんも一緒になつて働くんだよ。

あや子 そんなもんなの。

亮太郎 そんなもんさ。

あや子 さうでせうね。あたし、早くお父さんが見たい。

亮太郎 おやちの方で腰をぬかすか、君の方で眼をまはすか、僕も早くそれが見たいよ。

あや子 なぜ？

亮太郎 なぜつて、お互に意外だらうからね。君が想像してる僕のおやちと、おやちが想像してる僕の家内と、その両方とも、僕にはどうやら見當がついてる。實際と違ふ程度が、どつちも同じやうなものだよ。

あや子 さうか知ら……。お父さん、お髭を生やしてらつしやる？

亮太郎 さあ、髭つていふより、毛に近いものを生やしたかも知れない。どうして？

あや子 髪は分けてらつしやる？ それとも……。

亮太郎 禿げてるかつていふんだらう。まだ禿げてやしなかつたらう。薄いには薄いがね。

だが、分けてるなと思ふと大間違ひだぜ。第一……もう止さう、そんな馬鹿な話……。君は、駄目だよ。わからないかなあ、田舎の百姓爺がどんな恰好をしてるか……。

あや子 百姓爺つたつて、普通の老百姓ぢやないんでせう。

亮太郎 その差大ならず。僕が櫛を使つてたら、息子が女の眞似をするやうになつたつて村

中言ひふらしやがつた。

あや子 まさか。

亮太郎 (笑ひながら) まあ、そんなもんだよ。(間)今のうちに眠つとけよ。

あや子 もうねむくなくなつたわ。少し寒いかな……。……。

亮太郎 自分はどうなんだい。羽織はすぐ出せるやうにしてあるんだらう。朝晩はこの調子

だよ、これから……。

あや子 夏涼しいと變ね。

亮太郎 夏だと思はなけれやいいさ。なにしろ、裏の森ぢや鶯が啼いてるんだからね、今頃

……。

あや子 さうですつてね、去年の夏、輕井澤へ行つた友達がさう言つてたわ。輕井澤とそん

なに違はないんでせう。

亮太郎 もつといいとこだよ、變な毛唐なんかうろろしてなくて……。

あや子 あなたは西洋人が嫌ひね。

亮太郎 嫌ひだよ、あんな化物みたいなもの……。それはさうと、僕の方の田舎にね、初めて毛唐がやつて来たことがあるんだ。もう二十年も前だけれどね。それが、今で言へば山岳旅行をやつたんだね、毛唐のことだから……。すると、一人の百姓が、山の中でその毛唐に出くはしたらしいんだ。その百姓、びつくり仰天して、山を駈け降りて来たのさ。さうして天狗がゐた、天狗がゐたと、村の者に注進に及んだからたまらない、その頃は青年團なんていふものはなかつたから、屈強な若いものが、手に手に得物を携へて天狗退治に出かけた、といふのは嘘らしいが、兎に角、あとで、それが毛唐だとわかり、なるほど鼻は高かつたと、みんなが……。

あや子 うそばかりかし、そんな話……。だけど、ありさうなことね。(と言つて、今度は、腹を抱へて笑ひ始める)

亮太郎 それ見ろ、面白いだらう。君、毛唐好きか。

あや子 好きでも嫌ひでもないわ。

亮太郎 そんならいいや。

あや子 何がいいのよ。

亮太郎 なんだか忘れた。

あや子 ……。

亮太郎 兎に角、栗の木は見ものだよ。花が咲いてれば、一里手前から見える。

あや子 あたし、お辨當たべようか知ら……。お茶がないわね。さうだ、お茶がない。どうするつもりだつたのか知ら……。

亮太郎 飲まないつもりだつたんだらう。水で我慢するさ。この邊の水はいいよ。それに薬かも知れないよ。ラヂウムかなんか含んで……。

あや子 そんなら、すまないけど、汲んで来て頂戴。

亮太郎 何へ？

あや子 何かへよ、きまつてるぢやないの、その邊に空堀か何か落ちてないこと？

亮太郎 よし、君が、それだけ徹底してくれりや、水も汲んで來甲斐がある。待つて給へ。

(出て行く)

あや子 (辨當を開いて食ひ始める)

この間に、温泉廻りの上方者らしい男が、藝者か仲居風の女を連れて、汽車の時間表を見に来る。が、しばらくすると、また何處へか行つてしまふ。

亮太郎 (ビール壺を提げて歸つて来る)

あや子 (片手でそれにさはつてみて) あら、熱いのね。お茶を貰つてらしつたの。

亮太郎 男子意氣に感ずれば、お茶ぐらゐ貰つて来るよ。僕も食ふぜ。(腰をおろし、辨當を食ひはじめ) この魚、大丈夫か。

あや子 お茶、どうして飲むの。

亮太郎 自分で考へろ。

あや子 かうすんの? (と言ひながら、喇叭飲みをしようとするが、思はしく行かない。徒らに唇を尖らすばかり)

亮太郎 (素知らぬ顔で) 飲んだら、こつちへよこせ。

あや子 (すぐに) ちや、はい。

亮太郎 何だ。飲んでないぢやないか。(流石に、手際よく壺を傾ける)

あや子 これで、折角の、紳士旅行も臺なしね。

亮太郎 臺なしもんか。

あや子 だつて、あの汽車の中のすまし方はどう。あたし、可笑しくつて……。不斷のみもしない葉巻なんかふかしてさ……。脚をかう組んで、額に八の字をよせて、そして文藝春秋を讀んでる光景は、たしかに歴史的よ。

亮太郎 君はどうだ。……止さう、顔が赧くなる。

あや子 おつしやいよ。あたしのどかが可笑しい?

亮太郎 可笑しいさ、あんなに何べんも時計を見ちや……。

あや子 時計? あら……。 (笑ひながら) 汽車に時間はつきものよ。

亮太郎 驛長ぢやあるまいし……。しかし、君は案外可愛いらしいところがあるよ。四十圓の腕時計で、たうとう一晚の睡眠を棒に振るなんて。

あや子 (もう相手にならない) おいしくないのね、このお辨當……。 (ちよつと顔をしかめ) ども、お茶を飲まして……。

亮太郎 おやちより、弟を見てびつくりしやしないかなあ。

あや子 なぜ。

亮太郎 無愛想な奴だからさ。

あや子 そんな？

亮太郎 いつか、模範青年ついでいふんで縣で表彰されたんだがね、なんでも、そんな時、知事なんかゐる前で、この免状みたいなものは、なんにもならないから返すつて言つて、問題を起しやがつたんだ。

あや子 でも、痛快な方ね。

亮太郎 痛快でないこともないが、誰にでもその調子だからね。君なんかにも、平氣でどんなことを言ふかも知れないよ。

あや子 それがわかつてればいいわ。でも……。

亮太郎 亂暴なことはしやしないよ。ゐるかわらないかわからないやうな男だからね。十日も口を利かないことがあるよ。

あや子 まあ。

亮太郎 だから、こつちから、あんまり話なんかしかけない方がいい。うるさいと思ふと、返事をしないんだ、誰にでも……。

あや子 あなたにでも……。

亮太郎 (曖昧に) うん。(間) 自然、みんなとの折合が悪くつてね。それはまあ、近頃のことなんだがね。

あや子 みんなつて、おうちの方と……？

亮太郎 それより、村の顔役なんかとね。そのくせ傭人にはいらしいんだ。變なもんだね。使つてるものの評判は馬鹿にいいんだ。

あや子 社會主義ぢやない？

亮太郎 さうかも知れんよ。(間) そんなこともあるまいがね。

あや子 すつと、おうちにいらつしやるのね。

亮太郎 師範を中途でよしてね、嫌ひなんだ學校が……。本はなかなか讀むらしい、何處で探して來るか。

あや子 でも、さういふ方も面白いわね。あたし、朴訥な方、好きよ。

亮太郎 馬鹿ぢやないんだよ。

あや子 馬鹿なんて、そんな……。ぢや、東京の者なんかはお嫌ひでせう。

亮太郎 都會といふものを輕蔑はしてるね。あれで、なかなか、理窟を言はせると、言ふらしいね。

あや子 油断がならないわね。兄さんを負かしやしない。

亮太郎 こつちは、理窟は苦手だからね。農村問題なんか、眞つ平だ。

あや子 あなたは、もうすっかり都會人ね。

亮太郎 さうでもないが、所謂「根こぎにされたもの」の一人には違ひない。その點、弟の偉いところも、わかるにはわかるんだ。

あや子 それやさうだわ。生れた土地を離れないつていふことは、善し悪しは別として、美しいことだわね。

亮太郎 (妻の顔をつくづくと見つめ) 君にしてその言あり、世は擧げて郷土主義に靡くかと思はれるね。あゝあ、山川にして情あらば、嘗て一度志を立てて郷關を出でたる我れ、今、身に錦は飾らずとも、美しき妻を携へて、再び汝の懐に還り來れるを喜び迎へよか。ブウブカ

ドン、ブウドンドンだ。

あや子 おや、おや……。

亮太郎 (やけに茶を飲む)

長い沈黙。

あや子 霧が霽れてよ。

亮太郎 霽れた。(時計を見て) さ、出掛けよう。もうあと十分で出る。

あや子 輕便までは遠かないんでせう。

亮太郎 一足だよ。そこに見えてるぢやないか。あれの一時間は優に汽車の五時間草臥れる。大丈夫か。

あや子 大丈夫よ。

亮太郎 大丈夫か。そいぢや、辨當の空なんかいつまでも持つてないで、そいつを一つ持つた。

シューッケースを頭で指し、自分は信玄袋と行李とを両手に提げる)

あや子 (惶てて辨當の空を椅子の下に投げ込み、起ち上る)

亮太郎 (歩き出しながら) 旅行といふものは不思議なもんだね。動くことが苦にならん。

あや子 (これも歩き出し) ねえ、あなた、ちよつと待つて頂戴、(と言つて背中を夫の方に向け)
帯、ちやんとなつてる？

亮太郎 なつてる。

兩人、再び歩き出す。

第二場

山の中腹にある農家の前庭

日盛り……

大きな栗の木の根もとに、蓆が敷いてある。

亮太郎が蓆の上に腰をおろして、ぼんやり遠くを見てゐる。

そこへ、あや子が現れる。

あや子 もうおすみになつて、ずるぶん長いお話ね。

亮太郎 ……。

あや子 あたし、ああいふ時、何處にゐていいかわからないから、困るわ。お母さんは、ど

うしても、あたしに、お仕事のお手傳ひをさして下さらないの……。

亮太郎 長くゐるんぢやないからいいけれど、もう少し、「うちのもの」になれないかなあ

……。

あや子 あたし？

亮太郎 君が努めてるつていふことはわかるよ。努めたつて無理だつていふこともわかつてるんだが、どういふか、いちいち、いろんなことにこだはらずに、平気でやれないもんかなあ。

あや子 なんかこと？

亮太郎 なんかことつて……例へば、芋の皮をむくんだつてさうだ。やれ、お手傳ひしませうとか、やれ上手にむけるか知らとか、やれ、何んだとか、かんだとか、わざわざ、自分を自分で特別扱ひにしてるところがあるよ。

あや子 保次郎さんが、何か、あたしのこと、おつしやつたんでせう？

亮太郎 保はなんにも言やしないよ、君のことなんか……まあ、あんまり、あれこれと氣を遣はない方がいいよ。どうせ、しつくりは行かないにきまつてるんだし、しつくり行つたところで、どうにもならない話なんだ。もつと、呑氣にして給へ、呑氣に……。その方が、お

互に樂だよ。

あや子 あたしだつて、何も、それほど氣を遣つてるわけぢやないのよ。かういふ生活に慣れようと思へば、それや、もつと、どうにかしやうがあると思ふわ。だけど、やつぱり、お客さん氣分なんだから……。

亮太郎 それや、さうさ。僕が第一、さうなんだ。これが自分の家だと思つてみたところで、これをどうしようつていふ氣にはなれない。そのことで、今、保とも話をしたんだが、さしづめ、あいつから、無責任呼ばはりをされても仕方がないわけさ。

あや子 無責任だつておつしやるの。

亮太郎 まあ、さういふ意味なんだらう。それが、家運隆盛なら、僕が知らん顔をしてゐたつて、問題は起らないわけさ。——餘程苦しいらしいんだ。

あや子 ……。

亮太郎 君は、こんな田舎で暮さうとは思はないだらう。

あや子 事情によつては、そんなこと言つちやをられないわ。

亮太郎 その覺悟があるか。

あや子 だけど、あなたがここにいらつしやれば、どうにかなるつていふの。

亮太郎 それや、わからないさ。保の言ひ分は、はつきりしてる。——ただ自分たちが働いただけでは追つ附かない、人の物を搾り取らなければ……と言ふんだ。物事をさういふ風に考へるやうになつてゐるんだよ、あいつはね。

あや子 何時でも何か考へてらつしやるやうね。——あの眼は、とても素敵だわ。この間も、草鞋を作りながら、本を讀んでらつしやるのよ。あたしがそこへ行つたら、ぢいつと眼をあけて、こつちを見てゐるの。その眼の美しさつたらなかつたわ——澄んでゐて、深みがあつて、そのくせ、冷たい感じはしないの。

亮太郎 馬鹿に褒めるね。あいつは、案外、角が取れてゐるよ。もつとゴツゴツしてるかと思つたら……君なんかには、なかなか優しさうぢやないか。

あや子 ええ、それや優しいの。あなたのお話ぢや、どんなこはい方かと思つたわ。ただ、物を言ふのがお嫌ひね。どうかすると唾みたい。何を言つても、首を振るだけなの。張合ひがないつたら……。少し、恥かしいのね。まだ、子供よ。

亮太郎 さうか知ら……。だけど、何か君、見たつて言つてたぢやないか、二三日前……。

あや子 あれは、あなた……。それや、子供つて言つたつて、丸つきり子供ぢやないんですもの……。それくらゐのこと……。でも、あれを見て、あたし、ほんたうに綺麗なものを見たやうな氣がしたわ。

亮太郎 綺麗なものか……。つまり、ロマンスにしてゐるのさ、君の方で……。

あや子 それはどうでもいいの。なんだか、あたしたちのさういふやうなものと、全く違つた種類の……。別の世界にでなければいやうな、——だと思つたわ。

亮太郎 そんな大袈裟なものぢやないんだらう。——二十三にもなれば、男の戀愛は空想でなくなるよ。——誰もゐない川つ縁で、魚の泳ぐのを見てるやうなふりをして、そこへ來かかつた女の子を、呼び止めて見るぐらゐの度胸はついて來る。そればかりぢやない。何か手渡ししてたつていふぢやないか。

あや子 もう止ませう、そんな穿鑿は……。あたし、そんなつもりで言つたんぢやないの。ただ、さういふところを見て、自分でハツと顔を赧らめるやうな、そんな印象を受けなかつたことが不思議に思へたからなの。つまり、それほど現實ばなれがしてたんだわ。あの女の子、なんていふ名かしら……。何處の子かしら……。落葉掻きの歸りらしいのよ。



亮太郎　ますます詩的ぢやないか。パストラルだね。

あや子　さうよ……。なに、そんな笑ひ方して……。いやな方ね。(間)　また少し歩いてみないこと、その邊……。さうさう、あたしと一緒に歩くのは、何んとかつて言つてらしたわね。

亮太郎　目立つんでね。

あや子　(溜息をつき)　窮屈ね。

亮太郎　窮屈だが、仕方がないさ。強ひて周囲の感情と闘ふ必要もないさ。

あや子　さつきは、もつと平氣になれつておつしやつたくせに……。

亮太郎　だからさ、もつと平氣で土地にいた生活をすればいいんだよ。わざわざ、都會人ぶらなくつたつて……。

あや子　變なことをおつしやるのね。もう、わからない、あたし……。あなたは、もつと、人の氣持のわかる方だと思つてゐたわ。丸で無茶よ、この頃あなたのおつしやることは……。どうかしませうよ。このままぢや、お互につまらないでせう。あなたは、何かの不滿を、あたしの處へばかり持つていらつしやるんぢやない。

亮太郎　さうか……。さういふ處があるかも知れない。わるかつたよ。どうもいけないね、

かういふ生活をしてると……。頭がすっかり悪くなる。感覺が鈍くなる。精神に澁刺としたところがなくなるよ。田舎の生活が必ずしもわるいんだとは思はないが、自分の生活でなくなるからいけないんだ。君は、今日は顔色が悪いね。氣分がわるいんぢやない？

あや子　今、おつしやつたこと、あなたも氣がついてらつしやるなら、あたし、安心だわ。でも、ほんとに氣をつけて頂戴ね。ここにゐる間だけなら、まだいいけれど、あなたが、すつとさういふ風になつておしまひになるんぢやないかと思ふと、あたし、泣きたくなるわ。

(間)　さう言へば、あなたも、今日は、お顔色がよくないのね。さつきのお話で、また心配がふえたからでせう。(間)　でも、保次郎さんは、あなたのことを悪くは思つていらつしやらないんでせう、そんなに……。

亮太郎　好く思つてるとも言へなからうね。

あや子　困るわね。

亮太郎　別段困りもしないさ。こつちが向うをわかつてやるほど、向うぢや、こつちがわからずにはゐるだけさ。弟なんていふものは、そんなもんだよ。

あや子　あたしから、よくお話してみても駄目かしら……。

亮太郎　話すつて、何を話すんだい。

あや子　あなたの氣持なり何なり……。

亮太郎　僕の氣持を話したつてしやうがないさ。あいつに、どうして貰はうといふわけぢやないんだから……。

あや子　でも、誤解があつちや……。

亮太郎　面白くないといふのかい。しかし、それもね、時機の問題だと思ふんだ。今は何と
言つたつて駄目だよ。僕が、家の金を使つて、都會に出て、學問をして、そして郷里のことは顧みないで、下らない仕事をしてゐるといふのが、あいつの氣に喰はないんだ。そいぢや、
自分は、どれだけ郷里のために盡し、どれだけ有意義な仕事をしてゐるかといふと……（首
をふり）いけない、どうも、頭が悪い。しかし、あいつはなんと言つたつて、子供ぢやない
よ。なるほど、油斷のならないところがある。さつき言つたやうなことはかりでなく、僕自
身が、なんだか、あいつに脅かされてゐるやうな氣がしてしやうがない。

あや子　それはあなたのひがみよ。

亮太郎　それが君にどうしてわかる。——いや、僕の言ふのはね、あいつに、何か企みがあるといふやうな、そんなことをぢやないんだ。もつと運命的な、どうすることも出来ない二人の關係によることらしい。はつきり言ひ表すことはできないがね。（間）以前はそんなことはなかつたんだよ、二人とも小さい時はね、どつちかつて言へば仲のいい兄弟だつた。（空を見上げ）よくここで遊んだもんだ、この栗の木の下で……。ある日、學校ごつことをしようつていふんで、僕が先生になつたわけさ。もちろん、年上のもが先生になるのを當然と心得てゐたわけだが、あいつはいきなり、ぢや、兄ちゃん（あや子）が先生なら、おらは校長さん（亮太郎）と言ひ出しやがるんだ。それで學校ごつことはおじやん……。今度は、兵隊ごつことさ。その頃、松本の聯隊かなんかが村へ演習に来てね、子供たちは、盛んに兵隊ごつことをやつたもんだ——そこで、僕が軍曹になると言ひ出した。——可笑しいだらう、それはね、うちへ泊つた兵隊の頭が軍曹だつたんだ。さうすると、やつは、どうしてさういふ氣になつたか、いきなり、ぢや、おらは斥候だ、と言つて駈け出したまま、何處へ行つたのか、晩まで歸つて來ないんだ。これには僕も閉口したよ。やつはどうも、兄きを見きと思はないところがあつた。

あや子　それより、想像力があなた以上に發達してたわけよ。

亮太郎 想像力がね。うん、それはたしかにさういふところはあつた。(間) しかし、この栗の木の下は懐しいよ。(また空を見上げ) 五六年前に比べても、氣のせぬか、葉の茂り工合が、一層物々しくなつてゐる。東京附近に、こんな栗の木はちよつとないだらう。何しろ、この村で一番大きいんだからね。樹なんていふものも、これくらゐになると、どことなく靈的な偉大さといふか、一種犯すべからざる威嚴を備へて来る。神秘的でさへある。それにいろいろな思ひ出が結びつき、家といふものの傳統的な觀念が加はつて、今の僕の生活に、何か大きな力で働きかけて来るやうな氣がするんだ。考へやうによつては、氣味がわるい。

あや子

あなたは、東京にいらつしやる時と、まるで違つておしまひになつたわね。

亮太郎

どういふ風に……。

あや子

物事を妙に考へ込むやうになつてらつしやるわ。そんなぢやなかつただけけれど……。

亮太郎

(強ひて快活に) なに、考へてる最中のことを口へ出して言ふのと、考へてしまつた

あとで、何か別のことを言ふのとの違ひさ。新しい刺激がないと、同じことばかり考へるやうになる。ああ考へてみたり、かう考へてみたりするんだ。同じ頭で、同じ事をひねくつて

わるほど馬鹿げたことはないよ。(間) ところで、今晚はね、ちよつと長野まで行かなきゃならん用事ができたんだ。寂しいだらうけど、留守番をしてくれる？

あや子

どんな御用なの……。あたし、行つちや、いけない？

亮太郎

中學の同級會なんだよ。別に行つたつてしやうがないんだが、家のことで、また何かと世話になる奴も来るしするから、顔だけ出しとかうと思ふんだ。遅くなつても泊らずに歸つて来る。終列車で、あすの晝は歸れるから……。

あや子

さう……ぢや、しかたがないわね。それで、もうすぐお出かけになるの。

亮太郎

今、馬車を呼びにやつてある。(間) 洋服にしようか。

あや子

どちらでも……。白いのなら、洗濯をしなくつちや駄目でせう。着てらつしたままよ。ああいふもんの洗濯なんか、いつたいどうするの、——さうさう、訊いとかうと思つて……。

亮太郎

ぢや、和服にしよう。

あや子

でも、袴がいるでせう。

亮太郎

いらぬさ。いるもんか。(間) ぢや、出してくれ。(起ち上る)

あや子 (やや聲を落して) 昨夕ね、お母さんがおつしやつたのよ——あのね、保次郎さんの
単衣が、もう着られるのがないんですつて……。だから、古いんでいいから、亮太郎のを一
枚やつてくれつておつしやるの。

亮太郎 やつたらいいぢやないか。

あや子 ええ、それがね、浴衣なら二枚あるけど……単衣は、ちよいちよ衣着と、よそ行と、
一枚づつきやつて来なかつたでせう。どうしようか知ら……。

亮太郎 よそ行をやつたらいいだらう。

あや子 でも……あなたが……。

亮太郎 いいから、やれよ。今日は、ぢや、少し暑いけど、もう一つの洋服を着てかう。

あや子 さうなさる？

亮太郎 さうするより、しやうがないだらう。

あや子 今日は、いい方を着てらしつて、それを、あした、なにしたらどう……一日ぐらゐ
のびたつて……。

亮太郎 それぢや、まづいよ。すぐ出してやり給へ……。

あや子 お母さんは、やつぱり、保次郎さんが可愛いのね。

亮太郎 だから僕が可愛くないつていふわけぢやないよ。

あや子 いいえ、少し變だと思ふわ。あたし、そんなこと、言はれてするのは、いやよ。だ
つて、あの方、着物なんて召すことがある？ ないぢやないの。あたしが、行李を開けてる
のを御覧になつて、急にそんなことおつしやるのよ、お母さんは……。ちやんとわかるわ。
年寄りつていやなものね。

亮太郎 おい。

あや子 はい……。御免なさい……。 (間) あ、あの馬車でせう。あんなに埃を立てて……。

兩人去る。

舞臺、しばらく空虚。

保次郎、うつむき加減に、鍬を肩にかついで、ゆるやかに歩を運んで来る。彼は、古い紺の
ズボンに巻脚絆をつけ、上はシャツ一枚、無帽で髪を長く伸ばしてゐる。ちよつと立ち
止つて、あたりを見まはす。また歩き出す。栗の木のもとに、鍬を投げ出し、兩腕を腰に
あてて、一つ時、眼を細くして遠くの方を見入つてゐる。ふと、何か考へ込むやうに、空

を仰ぐ。溜息をつく。どつかと、席の上に腰をおろす。小型の書物を取り出して、頁を繰るが、それを讀み続けるでもなく、下に置いて、また溜息をつく。首をやけに振る。頭を木の幹にもたせかける。

第三場

前場と同じ。

月夜。

遠くで太鼓の音がする。

あや子が栗の木の下にしやがんでゐる。
亮太郎が現れる。

あや子 何處を歩いてらしたの……、こんなに遅くまで……。みんな心配してたのよ。

亮太郎 心配することはないさ。まさか自殺もすまいからね。

あや子 そんな心配ぢやないのよ。あなたは、すぐそれね……。 (間) 途中で、保次郎さんに

お遇ひにならなかつた？

亮太郎 保は、今、そこにゐたぢやないか。違ふかい。いや、遇はなかつたよ。月夜で道を迷ふ心配はないし、水車を抜けて、釣橋のところまでぶらぶら歩いて行つたよ。頭の痛いのもなほつた。

あや子 それやよかつたわね。あたし、また、何處へいらしたのかと思つて……。散歩の時は、何時でもさう言つて出てらつしやるのに……。

亮太郎 その邊をちよつとひと廻りして来るつもりだつたのが、つい、引張られて行つてしまつたんだ。

あや子 ……。

亮太郎 月の光にさ……。月の光といふものは、人をどこまでも引張つて行くものだよ。あれや、確に變だ。吸ひ込まれて行くとでもいふか、自分が歩いてゐるんぢやない、自分のまはりにある空氣が、からだを包んだまま流れて行くやうな氣がするんだ。

あや子 もう遅いのよ。何時だと思つてらつしやる？ やすみませうよ。

亮太郎 まあ聽けよ。ここに立つてゐると、この栗の木の下は暗いやうだらう……。葉が茂

つてゐて、ここだけが影になつてゐるせぬだ。ところが、遠くから見ると、そら、あの道の曲つてるところね、あの邊から見ると、このところだけが、うつすらと、妙に光つて見えるんだ。木の葉を透して來た月の光は、やつぱり青くなるのかね。青く、しかも、濡れたやうな光り方がする。その光の中に、むろん、君のさうしてゐる姿が浮き出してゐたよ。誰かもう一人ゐたやうだつたが、それははつきり見えなかつた。おほかた、君の影だらう。それとも、木の枝の影か……。さうだ、この枝だ……。(頭の上の枝を仰いで見る)なるほど、ここにかうしてゐると、自分のゐるところさへわからないね。(問)をかした木だよ、この栗の木は……夜見るとなほ不思議だ。まるで、木の下にゐるといふ氣持はしない。何か、かう、覆ひかぶさつて來るね。この二三日殊にさう思ふんだが、この木は、何か考へてゐるよ。何かしようと思つてるよ。人がここへ來ると、奇妙に葉が垂れ下つて來る。さうして、頭の上に重たいものを積み上げるんだ。すると、なんだか、からだがしびれるやうな風になる。呼吸がつかまつて來る。ちつと立つてゐられなくなる。(問)そら、もう、脚がふるへて來た。こら、(と言つて心臓に手をあて)ここがこんな……。(さう言ひながら、ぐつたりと、そこへ腰をおろしてしまふ)

あや子 (あつげに取られて、そこに立ちすくむ。が、氣を取り直して) あなたは、たしかにおつむが疲れていらつしやるのよ。神経衰弱つていふんだわ、一度お醫者さんに見ておもらひになつたら……?

亮太郎 大丈夫だよ。(問) そのくせ、ここへはよく足が向くんだ。そればかりぢやない。

おやぢに用がある。——おやぢはよくここで仕事をしてゐる。靜かに本を讀まうと思ふ。——ここが一番靜かだ。話相手が欲しい。——ここへ來れば誰かゐる。殊に、君の側に行きたいと思へば、ここに來さへすればいい。——君は、ここよりほか氣に入つた場所はないらしい。

あや子 そんなことはないんですけれど……。

亮太郎 別に悪いことぢやないからいいさ。だが、僕はもう、この木の下は御免だ。今日限り、ここへは來ないよ。(問) どうしてそんな處に立つてるの……。もつと側へ寄れよ。誰も見てやしないよ。さ、ここが平らでいい。

あや子 (言はれるままに腰をおろす)

亮太郎 そろそろ東京へ歸りたくなつたらう。それより、もうとつくにここがいやになつて

るかも知れない。よく辛抱してくれたね。

あや子 どうしてそんなことおつしやるの。ちつともいやになんかなりやしませんわ。ただね……?

亮太郎 ただ……?

あや子 ただ、あなたが、あんまり鬱いばかりいらつしやるから……。

亮太郎 さうか、それぢやもつと愉快にならう。君、今日は、午前中、何をした。

あや子 今日はね、この間から溜つてる新聞を讀んでしまつたの。

亮太郎 何か面白いことがあつたか。

あや子 あなた、御覽になつたんぢやない?

亮太郎 笑話だけさ。それと漫畫……。『ダブとドフ』ね、時事の附録さ、あれは傑作だね。

あや子 さう? あたし見ない。

亮太郎 お話にならん、あれを見ないなんて……。

あや子 どういふ話なの?

亮太郎 どういふ話つて……いろいろあるさ。それから、笑話にもなかなかいいのがある。

近頃感心したのにこんながある——男が、女を自分の横に坐らせて自動車を走らせて来る。奴さん、片手にハンドルを握り、もう一方の手で女を抱いてゐるんだ。それで、お巡りさんが、「こら、こら、両手で持たにやいかん」と注意したもんだ。すると、「自動車がどつちへ行くかわかりません」とやつたね。

あや子 (ぼかんとしてゐる)

亮太郎 わからんのか。

あや子 (やつとわかり) ああ、さう……。面白いわね。

亮太郎 面白くなささうな面白がり方だな。そいぢや、これはどうだ。(間) おい、聴いてるのか。

あや子 聴いてますわ。(間) でも、あなた御自身が、無理に面白がつてらつしやるんぢやない? 今日は……。お加減が悪いなら、もう家の中へおはいりになつたらいかか……? だんだん冷えて來ましたわ。また風邪でも召すと……。

亮太郎 もう少し、ね、いいだらう。もう少し喋らしてくれ。面白くなければ、黙つてほかのことを考へてゐてもいい。喋りたいといふ本能は死も恐れないといふ話がある。このまま

黙つて寝ろと言はれば、僕は、深く死を選ぶ。そこでだ、ええと、なんだつけな、君は、僕のうちを、もう少しどうかしたうちだと思つてたらう。かう聞くと君は、なんと答へていか解るまい。ぢや、言ひ直さう。僕がどうして君をこの家に連れて來たかと言へばだね、もちろん、こんなぼろ家を見せたいからでもなければ、おやぢやお袋に君を引合はせて、大いに孝行振りを示さうとしたわけでもない。君はどう思つてるか知らんが、それは發つ前にも言つた通り、おやぢもだんだん年を取るし、弟は家の身代を固めるといふことに興味も希望ももつてゐないし、やつぱり僕が一度歸つて、おやぢが死ぬまで相當に暮して行くだけのこととはして置かなければならんと氣がついたからなんだ。そこで、歸つて見ると、もう遅い。少しばかりあつた山も畑も、大方は人手に渡らうとしてゐる。君は、その時だね、ある失望を感じやしなかつたか。

あや子

……。

亮太郎 この栗の木も、そのうちに、誰かが來て、伐り倒して行くかも知れない。さういふ日が来るやうな氣がするんだ。

あや子 あなたの心配してらつしやることは、あたしには、ちつともわかりませんわ。あな

たのおうちの財産がどうであらうと、それが、あなたにとつてどうもなければ、あたしだつてどうもありませんわ。あなたは、そんなことを氣に病んでいらつしやるの。

亮太郎 そんならいいさ。ぢや、もうなんにも言ふことはないよ。(頭を抱へてかすかに身悶えする) 僕は、やつぱり東京へ歸らうと思ふ。その方がほんとだといふ氣がする。つまらんと言へばつまらんが、あんなものの研究も、しかけてみれば、續けてやりたい氣もするしね。さう言へば、この邊には、蝙蝠が多いんだよ。そら、昨夕も臺所にゐたぢやないか。今、巢を見つけてゐるんだ。

あや子 ぢや、毎日、森の中を歩いていらつしやるのは、それなの……？ お父さんが笑つてらしたわ。子供の時分は、あんなぢやなかつたつて……。いやね、黙つて……。

亮太郎 (妻の意外にも快活な調子に惹き入れられて) 言ふとまた五月蠅いからさ。子供の時分つて、僕が子供の時分は、おやぢはうちにゐた例しはないんだからね。祖父がうちにゐて畑をする、おやぢは材木を伐り出しちや、車に積んで町へ運んだもんだ。その頃が萩原家も得意の絶頂だつたらしい。おやぢは、何か君にこぼしやしないかい。

あや子 いいえ、別に……。でも、お父さんは面白い方ね。時々人を笑はせるやうなことを

おつしやるのね。

亮太郎 どんなこと……？

あや子 をかしいからよすわ。

亮太郎 いいから言つてみ給へ。

あや子 あたしが歸つて來たので……よしませう、つまらないことだから……。

亮太郎 そんなこと言つてるひまに言つたらいいぢやないか。君が歸つて來たので……？

あや子 村中の男がおめかしをし出したつて……。

亮太郎 馬鹿な……。

あや子 それ御覽なさい。

長い沈黙。

亮太郎 そんなこと言ふもんかい。君がさう思ふから言つたんだらう。白狀しろ。

あや子 いいわ、そんなら……。

亮太郎 怒らなくつたつていいさ。(間) さつきから太鼓の音がしてるね。お祭の稽古だな。

長い沈黙。

第四場

前場と同じ。

朝——霧が降つてゐる。

邊かに騒々しい聲が聞える。その中で、亮太郎の怒氣を含んだ喚聲が一段高く耳につく。最後に、「馬鹿ッ」と一聲、あとは寂寥。

あや子が、亮太郎を抱くやうにして、素足のまま、後ろを振り返りながら現はれる。栗の木の根もとに亮太郎を寝かせ、髪の毛を撫で上げ、その顔をのぞき込む。

亮太郎は、眼をつぶつて、苦しきうに呼吸をしてゐる。——あや子の絶望に近き表情。

あや子　あなた、しつかりして下さい。お苦しかありません。大丈夫ですか。おつむり冷や

しませうか。待つて頂戴……。〔立ち上り、その邊を見まはす〕誰か、ちよつと来て下さい。

〔返事がないので、自分で母屋の方へ走つて行く〕

やや長い間。

亮太郎　〔かすかに眼を開いて、手を額のへんに當ててみる。それから、喉をさする〕

あや子　〔金盥に水を入れて持つて来る〕いますぐ……。〔かう言ひながら、甲斐甲斐しく手拭を絞り、

それを額に當て〕いやよ、あなた、あんなことなすつちや……。〔夫の胸に泣き伏す〕

亮太郎　〔割合にはつきり〕保を見て来い。

あや子　いいえ、あの人は大丈夫……。

亮太郎　怪我はさせやしなかつたか。

あや子　いいえ、大丈夫……。でも、あぶなうござんしたわ、両方とも……。〔間〕あなた

がおわるいのよ、あんなことをおつしやるから……。もつとひどい怪我でもなすつて御覽なさい……。それこそ……。どうしてまた、あんな亂暴をなすつたの……。いや、いや……。

亮太郎　少し亂暴だつたな。〔間〕保を呼んで来てくれ。

あや子　まだいけません。もつとあとにさせよう。〔額を手でさはつてみて〕ここ、お痛い

せう……。お気分はどうもありません、もう……？

亮太郎 どうもない……。さつき、少しふらふらしたただけだ。

あや子 さうですとも、あんな太いもので……。だけど、當りどころがよかつたんですわ。

亮太郎 (苦笑しながら) うまく當ててくれたんだらう。こつちは夢中だつたが……。

あや子 あなたのは、そんなにひどく當つてません。だつて、ちやうどあん時、手でよけたの、あの人……。

亮太郎 詳しく見てたね。

あや子 さうぢやないけど……。あぶなくつて留められないんですもの……。それに、あの人たち、見てる人も見てる人ですわ。

亮太郎 あの人たちは、自分でやりたい人たちだ。人のでも、止めるのは、もつたいたいと思つてる。(急に跳ね起き) もういい。(さう言つたものの、ぐらぐらと眩暈が来て、思はず妻の肩に手をかける)

あや子 あぶない。だから、もつと静かにしてらつしやい、ね、もうしばらくの間……。 (そつと亮太郎を寝させる) ひどいわね、見舞にも來ないで……。このままうつちやらかしく

なんて……。

亮太郎 おやぢは……？

あや子 向ふにいらつしやるでせう。

亮太郎 お袋が心配してるといけないから、ちよつと、もう何でもないつて言つて來てくれ。

あや子 あつちからいらつしやるのが當り前ですわ。

亮太郎 外のもんの手前、來れないんだよ。ちよつと行つて來てくれ。それから、保にも、

氣の鎖まるやうに、僕がわるかつたつて謝つて來てくれ。

あや子 あたし、いや、そのお使ひは……。

亮太郎 おい、そんなこと言つてないで……。あそこへ來てる奴等には、さうした方がいいんだ。おれは、弟と喧嘩をして、この家を出て行く氣にはなれない。まして親類の奴等から後ろ指をさされるのはいやだ。あとになると具合がわるいから、今のうち、あつさり下手に出て置かう。おれもよつぽど馬鹿だよ。

あや子 それぢや、あなた、あんまり、御自身つていふものが無さすぎますわ。かうなつたらかうなつたで、理窟はありますもの……。

亮太郎 あつても、それはまづいよ。保が僕に向つてああ言つた。——百姓の子は百姓をし
ろと言つた。それをむきになつて怒れば怒る方がわるい。

あや子 でも、あんな言ひ方をしなくつたつて……。

亮太郎 そこだよ。あいつの腹は解つてゐる。こつちを侮辱することは、自分の主張を燃え
立たせる手段なんだ。あの時代には考へさうなことだ。あん時は、どういふものか相手が弟
だといふ氣はしなかつた。なんだか、仕事の敵といふやうな氣がした。いや、それより、不
思議なことには……自分の生活を脅す……悪魔のやうな氣さへしたのだ。

長い沈黙。

あや子 また興奮なさりやしない？

亮太郎 僕は、かう見えて、臆病なんだよ。(また起き上らうとする) もうよからう。

あや子 (押へつけるやうにして) 後生だから、もう少し横になつて頂戴。

亮太郎 (笑ひながら) だつて、ここはお前、寝るやうにできてないんだぜ。(頭を振つてみて)
どうもないよ。こら、どうもない。ぢや、少しもたれさせてくれ。(半身を起し、妻の方に寄り
かかる) をかしなもんだね、かうしてるのも……。

あや子 あたし、もう、ここ、いや……。なんて違つた生活なんでせう。二人つきりでわれ

ば、どんなに苦しんだつて苦しみ甲斐があるわ。道は一筋といふ氣がするんですもの……。

亮太郎 だから、東京へ歸るよ。明日にでも歸るよ。(ふと耳をそばだて) また向うが騒がし
いぜ。どうしたんだか、見て来て御覽。(間) あれ、保の聲だらう。何んと言つてる？ 誰
だい、あの聲は……。おやぢぢやないか。これや、いかん。早く見て來い。

あや子 (夫から離れ、用心深い足取りで奥に去る)

長い間。——この間に、亮太郎は、静かに起ち上り、栗の木に手を支へながら、首を伸ばすや
うにして奥の様子に聴き耳を立てる。

再び騒々しい喚き聲が聞える。それがひとしきり鎮まると、今度は、年を取つた女の、かき口
説くやうな泣き聲が、手に取るやうに聞えて來る。

あや子 (足音を忍ばせて歸つて來る)

亮太郎 なんだ。

あや子 保次郎さんが、またお父さんと……。

亮太郎　なんだつて……。

あや子　よくわからないけど、お父さんは、今すぐ出て行け、貴様こそなんとかつて大變な劍幕なの。保次郎さんの方は、變に皮肉な笑ひ方をしながら、もちろん、なんとかとなんとかは兩立しないんだから、こんな家にはゐられないつて、さつさと脚絆を穿かうとしてるの。それをお母さんが泣いて止めてらつしやるとこ……。

亮太郎　耳を傾けながら、(制するやうに)よし、よし……。

第五場

第一場と同じ。

深夜——

あや子が腰かけてゐる。その前を亮太郎が行つたり來たりしてゐる。
やや長い間。

あや子　あなた、腰かけていらしつたら……。何んだか、氣がせかせかして、なほ時間がたつのが遅いやうだわ。

間

亮太郎　静かになつたね。雨も止んだやうだ。

あや子　もつとひどい嵐になるかと思つてたのに……。

亮太郎 ああいふ時、君はなかなか勇敢だね。雷が鳴るたんびに、眼の色は變つてたが、あれツとかなんとか言つて、人に抱きつかないところは、たしかに女丈夫の面影がある。

あや子 おだてないで頂戴。

亮太郎 おだてるんぢやないが、あれでは、側についてる男は物足らないよ。こつちは、ひと通り壯烈な氣持になつて、君の出方一つでは、僕がついてるから安心し給へつてなことを、涙ぐらゐ眼にためてだね、あれでも、言つてみたかつたんだ。

あや子 馬鹿にしてるわ。

亮太郎 僕には、どうも近頃、さういふ欲求があるやうだ。

あや子 あたしが、勝氣すぎるつておつしやるんでせう。

亮太郎 さういふわけぢやない。

長い沈黙。

あや子 あしたの朝、着いたら、すぐ髪を洗ふの。

亮太郎 君はもうさういふことを考へてゐるのか。(間) 保の奴、きつと東京へ出て來るぜ。

あや子 ……。

亮太郎 保のことを言ふと、君はすぐ變な顔をするが、あれでも、僕にとつては一人きりの

弟だ。ああして家を出ては行つたものの、今頃、何處で何をしてると思ふと、ちよつと暗い氣持になるよ。同じ家を出るのにしても、僕たちのやうに、ほかに生活の基礎があれば、また別だがね。(間。突然、窓の外に向ひ) 誰だ、そこに立つてるのは……。

あや子 (ギョツとして。そつちの方を見る)

亮太郎 なあんだ、電柱か……。

長い沈黙。

あや子 あなたは、ほんとに、どうかしてらしつてよ。

亮太郎 どうかしてるね、確に……。あの栗の木の下がいけないと思つてゐたんだが、この停車場もよくない。ああ、眼が眩みさうだ。(どつかと腰をおろし、頭を両手でかかへる)

あや子 静かにさうしてらつしやい、黙つてね……。つまらないことばかりおつしやるからいけないの。なんでもないことを變にお取りになるからいけないのよ。

亮太郎 それやさうだ。君はなんでも知つてる筈だ。早く東京へ歸らう。

あや子 ええ、歸りませう。

間。

亮太郎 田舎つていふところは、どうして、かう、總てが陰氣に出来てるんだらう。山も陰

氣だ。森も陰氣だ。谷も陰氣だ。家も木も草も、動物も人間も、みんな陰氣だ。陰氣なばかりぢやない。毒氣を含んでゐる。僕だけ知ら、さう思ふのは……？

あや子 あなただけよ。あなたのさういふ氣持が、あたしにもうつたといふだけよ。

亮太郎 君にもうつたつてね。それぢや、君は、なにか、あの家を、初めは陰氣だと思はなかつたかい。

あや子 陰氣だとは思はなかつたわ。

亮太郎 それぢや、どう思つた。

あや子 どうつて別に……。

亮太郎 あの栗の木だつてさうだ。

あや子 また栗の木……。

亮太郎 さうだ、よさう。(間)だがね……。さうだ、よさう。

長い沈黙。

あや子 東京はまだ暑いでせうね。

亮太郎 暑いだらうね。(間) どうして、そんな暗い方ばかり向いてるの。誰かそこにゐるの？

あや子 (哀願するやうに) あなた……。

亮太郎 馬鹿なことを言ふもんぢやない。(起ち上り、またその邊を歩き廻る) おやぢはね、おれが死ぬまで歸つて來んでもいいつて言ふんだ。それはどういふ意味だと思ふ。君には、あまり口を利かないやうだつたね。

あや子 ええ。

亮太郎 しかし、君のことを感心してたよ、よく氣がつくつてね。田舎者が感心するつていへばそれくらゐのとこさ。(間) お袋は、君を人間扱ひにはしてなかつたね。いや、ほんただよ。少くとも、ただの人間だとは思つてなかつたよ。お辭儀ばかりしてたぢやないか。あれも、變な婆さ。笑ふつていふことを忘れてしまつたんだね。

あや子 ほんとに……。

亮太郎 昔から、あの村では、村で一番の何々つていふ具合に、いろんな名物を數へ上げて、

それを事毎に噂し合つたもんだ。村で一番の金持が何處の誰、村で一番の年寄が何處の誰つていふ、それをまた、子供達までが聞き覚えてね。すむぶん滑稽な話さ。僕なんか、小さいくせに、その頃村で一番の美人だつたお初さんといふ娘を見に、そつと、その家の庭へ忍び込んで行つたもんだ。もちろん、一人でぢやないよ。(間) 今ぢやもう、そんなことを問題にしなくなつたらしいね。世間が廣くなつたんだ。(間) 村で一番の栗の木つていへば、だから、その時分は、相當自慢の種さ。どうして笑ふの。だから、今ぢや、自慢にもならないつて言つてるぢやないか。(間) 君は、今度、僕の家つてもものを見て、がっかりしたらう。

あや子 また、そんなこと……。

亮太郎 やつぱり、あの栗の木だけかな、さうしてみると、君に見せるつていへば……。

間。

あや子 それを伐らしておしまひになるのは惜しいわ。

亮太郎 どうせおやぢが承知しやしないよ。そこで、もうこつちは、栗の木なんかにはないんだから、さつさと、こんな處は引上げて、もつと氣の利いた生活を始めると、それでいいぢやないか。(間) さ、もう少し愉快な話をしよう。

あや子

……。

亮太郎 僕はね、今度東京へ歸つたら、どつかで借金をして、家を一軒建てるよ。自分で設計をしてさ。この間うちから、それを考へてるんだが、庭はどういふ風にしよう。木を植ゑるとすると、どんな木がいいかね。

あや子 サルスベリつていふ木ね、あの木、あたし好き……。

亮太郎 サルスベリか、あれもいいね。

あや子 栗の木は……？

亮太郎 おい、よせ。

長い沈黙。

あや子 なによ、そんなに大きな聲を出して、見つともないぢやありませんか。

亮太郎 やつぱり言つてしまはふ。いいか、君は、僕にかくしてることがあるだらう。栗の木が何んだ。どうして、君は、そんなことを言ひ出すんだ。栗の木の下でどうしたといふんだ。それを言つてみ給へ。

あや子 なにおつしやるの、あなたは……。

亮太郎 なんにも言やしないよ。君が言ひ出すのを待つてるんだ。今日まで、どんなに我慢をしたか。もうよからう、この邊で、解決をつけよう。

あや子 なんの解決……？

亮太郎 駄目だ。君にさう出られると、やつぱりこつちの負けだ。なんでもない、そこで、その庭だ。サルスベリを一本と……。

あや子 なによ、はつきりおつしやいよ。栗の木つて言つたのがわるかつたの。

亮太郎 悪かないよ。まあ僕の言ふことを聽け。庭にはサルスベリを一本と……。僕はね、伊太利風の庭園にしようかと思つてるんだが、どうだらう。

あや子 どうも變だと思つたら、やつぱり、さうなのね。そんならさうと、どうしてもつと早くおつしやらなかつたの。

亮太郎 なんでもないつて言つてるぢやないか。それとも、少し植木に金をかけて、純日本風の庭をこさへようか。サルスベリだつて植ゑられるよ。

あや子 ねえ、あなた、今のお話、ちやんとして下さらない。何時までも、そんな風に思つてらつしやるといやだから……。

亮太郎 もういいんだよ。僕が悪かつたよ。家の方は、そんなに廣くなくつてもいいね。

あや子 そんなこと、いや、誤魔化さうとなすつちや……。あたし、聽かないから……（首を振る）

亮太郎 だから、僕がわるかつたつて云つてるぢやないか。もうわかつたよ。何とも思つてやしないよ。

あや子 ほんとね。

亮太郎 ああ、ほんとだよ。

あや子 きつとね。

亮太郎 きつとだよ。そんなにむきになる奴があるかい。戲談なんだよ、あれや……。

あや子 また、そんな……。

亮太郎 だから、それでいいつていふのに……。うるさいなあ。（いきなり、急ぎ足で外に出る。が、しばらくして、戻つて来る）綺麗に晴れてる。星が一杯だよ、空は……。ここへ着いた時は朝だつたね。さうさう、そこで辨當を食つたつけな。あん時は、それでも、大いに歸省氣分かなんかで、輕便の時間を待ち遠しがつたもんだ。一月のうちに、變れば變るもんだね、

氣持なんていふものは……。しかし、人間には、ほんたうに故郷といふものが必要なのかねえ。君なんかどうだい。東京が戀しいといふのは、故郷だからといふよりも、都會だからといふ理由の方が主だらう。僕が東京を戀しがると同じわけに違ひない。都會は住んでみないと、ほんたうの有難味がわからない。田舎の生活は、想像してゐる方が楽しいといふのは眞理だね。

あや子　それも、人によりはしないこと？

亮太郎　人によるかも知れないが、田舎はもう懲り懲りだ。

あや子　やつぱり、家といふものが中心にならなければ……。

亮太郎　それや、さうだ。結局、情愛の問題だね。親とか、兄弟とか——君はまあ、さういふものはないからいいけれど——煩はしい關係といふ以外に意味のないものかも知れないよ、どうかするとね。

あや子　それが不思議よ、あたし……。

亮太郎　僕だつて、不思議でないことはないさ。こんな筈ぢやないと思ふこともあるが、さう思つても、やつぱりどうすることもできないんだからしやうがない。

あや子　不幸ね。

亮太郎　フカウ……？

あや子　ふしあはせね。

亮太郎　ああ、さうさね……。まあ、しかし、それもどうだかわからないさ。肉親の愛だけが、人間を育てて行くわけのものぢやないからね。

あや子　夫婦の愛は……？

亮太郎　それは口に出すべきことぢやない。

あや子　あら、どうして……？

亮太郎　さういふものなんだよ。(時計を見ながら) もう、ぼつぼつ、切符を賣りさうなものだね。(切符賣場の方へ近づく)

あや子　秋みたいね、今夜は……。

亮太郎　……。

あや子　全く秋だわ。

亮太郎　しみじみとかい？

あや子 ええ、しみじみと……。

亮太郎 駄目ぢやないか、先を言はなけれや……。

あや子 だつて、何にも言ふことはないわ。

亮太郎 ぢや、しかたがない。(朗吟するやうに)

けふつくづくと眺むれば

悲みの色口にあり

たれもつらくはあたらぬを

なぜに心の悲める。

……………。

あや子 それ、なんの歌……？

亮太郎 知らないのか。秋の歌さ。——秋風わたる青木立……と續くんだが、それはまあ、

それとして、向うから、誰か提灯をつけてやつて来た。

あや子 この汽車に乗るんでせう。

亮太郎 提灯は二つだ。發つ人、送る人か。

あや子 ……。

亮太郎 (あや子の傍に座を占め) 此の停車場も、これでしばらく見納めだ。

あや子 さう思ふと、やつぱり、ちよつと變でせう。

亮太郎 變なもんかい。(問) しかし、君はうれしさうだね。ほんとにうれしいのかい。東

京へ歸るのが、そんなにうれしいか。

あや子 ええ、うれしいわ。

亮太郎 もう、二度とここへは來たくないか。

あや子 來たくない。

亮太郎 どんないことがあつてもか。

あや子 どんないことがあつても……。

亮太郎 そんなら、いつまでも、僕のそばを離れないか。

あや子 離れない。

亮太郎 どんないことがあつてもか。

あや子 (うなづく)

亮太郎

(起ち上り) よし……。

あや子

(顔をそむけ、指の先で、そつと涙をふく)

亮太郎

(その邊を歩きまはりながら) 村で一番の栗の木よ、今年もうんと實が生れ。

—幕—

犬は鎖に繋ぐべからず (三場)

人物

今里念吉
 同 二見
 同 甲吉
 黒林家の女中ため
 酒屋の御用聞
 大申葉繪
 片倉州蔵の妻まつの
 女の子
 百瀬鬼骨
 郵便配達
 男の子
 陸軍歩兵大尉島貫
 片倉州蔵

配役 (昭和五年六月 於新橋高舞場)

伊志井寛
 花柳章太郎
 齋田照子
 木村操
 松下誠
 英太郎
 村田式部
 大島玉枝
 小堀誠
 吉井潤
 椎名進
 山田巳之助
 菊波正之助

平大野球部選手越水
 同 クマソ
 同 ヤモリ
 近所の人櫛谷
 同 尾畑
 同 黒林
 同 兩角
 同 岩城
 同 藤卷
 隠居多胡鶴人
 近所の人
 同 A
 同 B
 同 C

柳永二郎
 本郷道夫
 藤井昇
 藤岡勝英
 南一郎
 松本要次郎
 若井信男
 吉岡啓太郎
 吉岡啓太郎
 渡邊一郎
 大東鬼城
 上田史郎
 橋本清三郎
 辰巳鐵之助

時 現代

所 東京の郊外——最近水田を埋立てた第七流住宅地。

第一場

今里念吉の住居。正面に磨硝子戸入りの玄關。右手に杉丸太の門柱。玄關の右に澁塗りの洋館。左手に座敷と茶の間。芝生の庭に手製のプランコ。椽に近く粗末な犬小屋。

初夏の午後。

息子の甲吉(八歳ぐらゐ)が、三輪車に乗つて外から歸つて来る。椽側から奥に向ひ、發育不良の聲で母を呼ぶ。

甲吉 ママア！ ママア！

聲 (奥で) なんです、そんな聲を出して……。 (二見、茶箸をもつたまま現はれる) 駄目ですよ、静かにしなくつちや……。 パパは今御勉強なんだから……。

甲吉 (それにかまはず) ママア、僕、落第坊主ぢやないねえ。

二見 落第なんかするもんですか。からだが弱いから先生と御相談して、一年學校を休むことにしたんです。第一、學校へは一月も行きやしないぢやありませんか。

甲吉 それから、うちのベスは野良犬ぢやないねえ。

二見 野良犬なもんですか。あれは、お前のお友達にと思つて、一昨年、湧山さんからいただいたんですよ。種類は忘れたけれど、ちゃんと素性のわかつた犬です。パパがもう少し手入れて下されば、毛並だつて、この邊のどこの犬にも負けやしません。

甲吉 そんならね、ママ、うちのパパは、英語よりほかなんにも出来ないつて、ほんと？

二見 英語の先生なら、英語だけできれば澤山ぢやありませんか。いろんなことが少しづつ出来るよりも、一つのこと立派に出来る方がいいんですよ。一體全體、誰がそんなことを言ふの？

甲吉 僕のことを落第坊主つて言つたのは、ケンちゃんだよ。

二見 ベスのことを野良犬だつて言つたのは……？

甲吉 それはね、坊主ちゃん……。

二見 また、「坊主ちゃん」なんて言ふんぢやありません。「ツルヲさん」つておつしやい。

それから、パパのことをなんとか言つたのは……？

甲吉 忘れちやつた……。 (彼は三輪車を運轉して、また外へ遊びに行かうとする)

二見 もう御飯だから、お家にいらつしやい。餘計なことを言ふ子供たちと遊ばなくつたつていいのよ。

近所で、また、ピアノの練習を始めたらしい。單調な音階がうるさく繰り返される。

二見 (洋館の方に行き) パパ、あと十五分で御飯にしますから、そろそろ、おつむをお休めになつてね。甲吉が歸つてますわ。

やがて主人の念吉が座敷に現はれる。

念吉 (にやにや笑ひながら、口吟むやうに)

"O miserable of happy! Is this the end

Of this new glorious World, and me so late

The glory of that glory?" ……

(夢中で三輪車を運轉してゐる甲吉を見つけ) 甲吉君、元氣かね。さつき、床屋の前で、君に石

をぶつつけようとしてゐた子供は、あれや、何處のなんといふ子だい？ 君は平氣で三輪車の曲乗をしてゐたね。パパが通るのを知らずにゐるから、パパは、黙つて來てしまつた。それに、友達の前で、おやぢに口を利かれるのは、てれ臭いもんだ。

永い沈黙。

甲吉君、運動は、もうそれくらゐにしといたらどうだ。ここへ來て、一息休み給へ。そして、パパと一緒に、青葉でも眺めようぢやないか。臺所から匂つて來る香ひは、これや、てつきり、ママお得意の箱入りチャブスイだ。何時かのやうに、焦げついてくれなれやいゝが……。

この時、門をはひつて來る一人の婦人がある。玄關の外で、呼鈴のボタンを探してゐるが、みつからないので、「御免下さいませ」と聲をかける。

中吉 (三輪車をとめ、父に向ひ) 坊つちやんとこの「ためや」だ。

念吉 何か御用ですか。

甲吉は、椽側から奥へ飛び込んで行く。

ため 旦那さまでいらつしやいますか、わたくし、その黒林のものでございますが、ちよ

つと、奥さまに……。

念吉 奥さんは、今、飯の用意をしてゐますが、僕ちやわかりませんか。

ため いえ、實は、お宅のベスのことで伺ひましたんですけれど……。

念吉 ベスのことですか。

妻の二見が、奥から玄關に出る。念吉は、椽側に立つたまゝ、女たちの會話を聴いてゐる。

二見 失禮いたしました。黒林さんのお女中さんでしたね。そして、御用は……？

ため はい、實は、申上げにくいことでございますけれど、お宅のベスが、今日、宅の旦那さまのお靴を片一方衝へて行つたんでございますよ。あたくしの不注意からなんでございませけれど、もしや、こちらへ持つて來てはをりませんかと存じまして……。

二見 まあ、それは、それは、飛んだことをしましたね。今朝から、ちつとも見かけませんのですけれど、どんなお靴でせう。

ため 赤革の、かう、ポツポツの模様をついた、旦那さまが一番度々お召しになる編上なんでございますが……。

二見 それぢや、よく、氣をつけておきますわ。ほんとに御迷惑でしたね。そんな悪戯をす

るなんて、ちつとも存じませんものですから……。でも、おつしやつていたゞいてようござんした。これからのこともありますからね。何れ、どつちにしても、あたくし、御挨拶にあげますけれど、奥さまによろしくおつしやつて頂戴ね。

ため　では、どうぞ……。御免遊ばせ。

二見　どうも。御苦勞さま。あ、それから、甲吉が度々お邪魔に伺ひますんですつてね。

ため　いゝえ、……。

黒林家の女中が去つたあと、二見は、座敷に来て、念吉の顔を見る。

二見　お聞きになつて？

念吉　あゝ、聞いた。

二見　どうしませう。

念吉　それを、今、考へてるところだ。いくら犬でも、靴を片一方、食つちまふわけはあるまい。何處へ持つて行くかだが、この探索は、ちよつと困難だね。僕の靴が古くなつたからと思つて、代りを見つけて来るほどの忠犬でもなしね。

二見　辨償するつていつても、向うちや氣持よく思はないでせう。

念吉　あの家が五千圓かゝつたといふんだから、穿いてる靴も十八圓ちや利くまい。それより、近所を探してみることにしよう。いよいよ無かつたら、その時、なんとか始末をつけるさ。おい、甲吉君、君も一緒に來い。

彼は下駄をつゝかけて外に出る。甲吉はその後から、走つてついて行く。

二見は、これも庭に降りて、椽の下、犬小屋の中、植込の間をのぞきまはり、その足で裏の方に廻る。何處かで鶏の啼く聲。

二見が、家をひと廻り廻つて、門のところへ出て來ると、表を酒屋の御用開が通る。

二見　ちよつと、三良さん、あんた、うちの犬を、何處かで見なかつた？

三良　さあ、今日はと……。あゝ、今朝、何處かの鶏を追つかけまはしてるところを見ましたよ。幼稚園のそばでしたよ、たしか……。ゐなくなつたんですか？

二見　そんな時、靴を銜へてやしなかつた？

三良　靴ですか。さあ、銜へてないやうでしたよ。

二見　さう、ありがたう。あんた、さうして歩いて、靴が片一方落つこつてたら、拾つて來て頂戴ね。お駄賃をあげるから、……。赤革の、かう、ポツポツの模様のある、かなり上

等の編上だから……。

三良 旦那ですか。

二見 男の靴よ。なんでもいゝから、落つこつてる靴は、みんな一度、うちへもつて来て見せて頂戴。

三良 畏まりました。毎度ありがたう……。

御用聞が行つてしまふと、今度は、大串葉繪が、切花を手に持つて通りかかる。識るでもなく識らぬでもなき間柄とみえ、軽い會釋をしたまま行き過ぎようとする。

二見 (追ひ纏るやうにして) ちよつと、失禮でございますが、そこのお花のお師匠さまぢやいらつしやいませんか？

葉繪 さやうでございます。あたくし、大串葉繪でございます。

二見 あたくし、今里の家内でございます。始終お見かけしてゐながら、まだ御挨拶もいたしませんで……。お嬢さまが、ほんとにお可愛くつて……。

葉繪 どういたしまして、お宅の坊つちやまこそ、おとなしい、御利口さうな坊つちやまでいらつしやいますこと……。

二見 多分、ちよくちよくお邪魔に上がることに存じます。それから、子供ばかりでなく、宅の犬がまた、きつと、お庭を荒しますことでございます。

葉繪 とんだ御心配で……。どうぞ、ちよつと、奥様も、お話しにいらしつて下さいませ。獨りもので、淋しく暮してをりますから……。 (花を見せながら) こんなことでも致してをりませんと、日が永うございまして……。

二見 結構でございますわ。(もじもじしながら) あのう……だしぬけに妙なことをお願いいたしますけれど、もしや、お宅の裏にでも、古靴が片一方落ちてをりましたら、宅の犬が銜へて参つたんでございますから、ちよつと、お知らせ下さいませんでせうか。まことに相済みませんけれど……。

葉繪 それはまあ、お困りでいらつしやいませう。早速、調べてみることにいたします。ほんとに、どんなにお躰けがよくつても、犬つて申しますものわね。

二見 いゝえ、もう、野良犬同然な犬でございますから、なにをいたしますか……。

葉繪 では、人を待たせてございますから、これで……。

二見 お呼びとめして、ほんとに……。

兩人、丁寧に辭儀をし合ふ。二見は、しばらくその後を見送つた後、家の中にはいる。やがて、膳ごしらへをはじめ。そこへ、六つぐらゐの女の子の手を引いて、片倉州藏の妻まつのが、この家の玄關口に立つ。

まつの 御免下さい。

二見 はい。

二見は玄關に出る。

二見 どうぞ、お明け下さい。

まつの (玄關の戸を明けるが、中にはいない。にべのない挨拶) わたくし、その幼稚園のそばにゐるものでございますが、今日、お宅の犬が、宅で飼つてをります鶏を追つかけまはして、噛み殺してしまつたんでございますよ。すぐには死にませんでしたが、さきほどたうとう駄目になりました。宅では、よそ様のやうに卵を生ますために鶏を飼つてるんぢやございませんです。これの遊び相手に二三羽飼つてみたんでございますけれど、毎日のやうにお宅の犬が追ひかけますんで、これが、そのたんびに騒ぎますんです。今日なんか、羽根を銜へられて、藻掻いてゐる様子をみますと、これが、あたくしにしがみついて、狂ふやう

に泣くぢやございませんか。鶏小屋へ入れておけばいいとお思ひになるかも知れませんけれど、それでは、子供が、一緒に遊んでゐるといふ氣がいたしません。鶏の方でも、それはよくこれになつきました、餌なんかも手からたべるやうになりますし……。

この時、今里念吉は、甲吉をおぶつて、門をはいつて来る。玄關の人聲に氣づき、立ちどまる。

まつの (念吉の姿を見て、軽く腰をかどめ、そのまま喋りつづける) 兎も角、代りを買へばいいといふやうな鶏ではないのでございますから、ほんとに當惑してをりますんです。

念吉 お宅の鶏が見えないんですか。

まつの (突剣呑に) 見えないんぢやございません。現に、お宅の犬に噛み殺されたんでございますよ。

念吉 それは、それは……。

まつの かうして伺つたのは、別に、どうしてただかうつていふんぢやございません。できてしまつたことは、しかたがございませんからね。ただ、これから、犬を繋いどいていただきたいんでございます。晝間だけでも、さうしといていただきませんと、鶏を庭で遊ばせ

ることができませんですからね。卵を生ませるだけなら、小屋で飼へますけれど……さつきも申上げましたやうに……。

念吉 わかりました。誠に申わけありません。犬は繋いでおくことにします。これから、お迷惑はかけないつもりです。して、その死んだ鶏は、どうしませう。

まつ の それや、もう、どうしていただかなくつてもよろしいんです。庭の隅へ、お墓でもこしらへて、末永く弔つてやるつもりでございますから……。

念吉 あなたの方はそれでいいとして、僕の方は、それぢや困ります。犬を代りに殺してみたところではじまりませんし、辨償をするにも、金には代へられないとなると、いつたい、どうしたらいいんですか。つまり、犬がわるいんだから、その犬に刑罰を興へるとおつしやるんですか。

まつ の いいえ、犬よりも、お宅の方でお氣をおつけになつて下さればよろしいんです。

念吉 なるほど、その御注意は有がたくお受けします。

二見 でも……それぢや、代りの鶏でも買つて差上げることにいたしませうか。ほんとに、あの犬には困つてしまひますわ。

まつ の かう申しぢやなんです、この邊の鶏を飼つてらつしやるお家ぢや、みんな、お宅の犬には困つていらつしやいますよ。わたくしのところばかりぢやないんですからね。いちいち、さうおつしやつていらつしやいませんでせうけれど、このお隣りの尾畑さんでも、大事になすつてらしたチャボが一羽、何時の間にかゝなくなつたんですつてね。多分お宅の犬だらうつて、さう言つてらつしやいましたよ。

二見 何時のことですの、それは……。

まつ の つい、先達ですけれどね。——なにしろ、ちよつと、外へ出て御覧になればわかりますよ。あの犬が、毎日のやうに方々の鶏を追つかけまはしてゐることを、お宅では御存じないんですかしら……。

二見 ちつとも存じませんの。ほんとに、今日さういふことを伺はなければ、何時までも皆さんにお迷惑をかけるどころでしたわね。(夫に向ひ) ベスは、その邊にゐませんでしたか。

念吉 ゐないよ。靴もないよ。甲吉が寝ちまつた。犬は、歸り次第、嚴重に縛りつけます。

二見 失禮ですが、どちら様でございます。

まつ の いゝえ、名前なんか申上げては仕様がございません。どうか、それでは、今後のこ

とをお願いいたします。

二見 かしこまりました。何れ、なんとかして御挨拶に伺ひます。こんなところで、御免下さいませ。

まつの去つた後、念吉は、黙つて玄關から上にあがる。

念吉 (座敷に現はれ) さ、おろしてくれ。

二見 (座蒲團の上に甲吉を寝かせ) 今頃寝てくれちや困りますわ。

念吉 よつぽど草臥れたんだ。それに近所を一軒一軒尋ねて歩いたんだからね。空地といふ空地も見て歩いた。ところで、靴つていふものは、割合落ちてないね。しかし、なかなか思ひ掛けないものが棄ててあるよ。

二見 (子供に掛蒲團をかけ終り) 靴も靴ですけれど、今の話はどうしませうね。

念吉 向うの言ふとほりにするほかないさ。鎖は、何處へしまひ込んだかなあ……。

二見 それほどにして飼つておく犬ですかしら……。湧山さんがあんまり御自慢をなさるもんで、子供が生れたら一匹下さいつて、なんの氣なしに言つてしまつたんですわ。初めのうちは甲吉も悦びましたけれど、近頃では、まるで見むきもしませんよ。かまつてやらないせ

ゐもあるでせうけれど、毛は汚れ放題、蟲はたかり放題で、その上、意氣地がないことと來たら、餘所の犬を見さへすれば、どんな犬にでも尻尾を垂れちまつて、いきなり降參の恰好ですもの。連れて歩くんだつて、こつちが恥かしいくらゐですわ。

念吉 君はさういふ風に、さも自慢らしくベスの悪口を言ふが、そんなら僕が警察へ引渡さうつて言つた時、頑強に反対したのは誰だい。一步譲つて獸醫にモルヒネを注射して貰はうと提議しても、君は、僕の前に立ち塞つて、如何にベスが泥棒の用心になるかを力説した。

二見 ですから、何處かで貰つてくれれば、すぐにでもやりますわ。

念吉 あの犬をかい。いきなり降參の恰好をする犬をかい。

二見 それや、仕込みやうで、どうにでもなりますわ。飼主次第ですわ。

念吉 よし、假りに僕の仕込み方が優柔不斷であつたとしよう。それならそれで、せめて、見場だけでも、もうちつと好くなくつちやね。なるほど、あいつには、面白いところがある。しかし、これは飼つてみないとわからない。僕は別段、あの犬に愛想をつかして殺してしまはうと思つたわけぢやない。こんな飼ひ方をするくらゐなら、飼つておかない方がいいと思つたまでだ。あの犬を餘所へやることは、流石に僕も氣がつかなかつたよ。あ、歸つて來た。

ベスー　ベスー（彼はいきなり立上り、椽側に出て犬を呼ぶ、それから、下駄を穿いて庭傳ひに犬をつかまへに行く）　ベスー　ここへ来い。（やがて、犬の首環をつかまへて小屋の前へ連れて来る）
こら、ベスー　もうちつとほかに遊び方はないかい。靴が面白けれや、おれの靴があるぢやないか。餘所の鶏なんか追つかけずに、そろそろ女友達でも作つたらどうだ。

二見　（チャブ臺の前にすわり）　そんな氣の利いたことができるもんですか。

念吉　おい臺所の棚をみてくれ。鎖はあそこへ置いた筈だ。

二見　夜は何處へも行きやしませんよ。

念吉　いや、朝、いはかれるのを待つてやしまい。何んでもいいから持つて来てくれ。

二見　（臺所から鎖を持つて来る）　あとでよく手を洗つて下さいね。

念吉　氣の毒だが辛抱しろ。そのうちにまたいいこともあるだらう。

彼は犬を縛り終ると、膳に向ふ。箸を取上げる。すると、その時、百瀬鬼骨が半死半生の牝鶏を小脇にかかへて玄關に現はれる。

鬼骨　御免！　お留守ですか？

二見が取次に出る。

二見　どうぞ、お開け下さい。

鬼骨　（玄關の戸を開け）　わたくしは、ついそこをります百瀬ですが、實は、御迷惑な御相談に上りました。

二見　はあ、まあ、おはいり下さいませ。

鬼骨　いえ。ここで結構です。わたくしは、昨年、失職以來、妻子を國元へ歸し、唯今、獨りで、その家を借りてをるんですが、なにしろ暇なものですから、それと、朝食の卵ぐらゐは買はなくてもすむやうに、コーチンを三羽ばかり飼ひましてね。

二見　はあ。

鬼骨　まあ、ぼつぼつやつてをるんですが、どうも、生憎お隣が大家さんでしてな。大串葉繪といふ花の師匠がおります。家賃を半年も溜めて、毎日、顔をつき合はせるのはあんまりいい氣持ちやありませんよ。目下、それとなく立退きを命ぜられてゐるやうなわけでは……。ついてはです。なに、なんでもないことですが、お宅の犬に噛みつかれてこの通りふいふいになつてゐる鶏をですな、もし、これにくたばるやうなことがありましたら、一つ、お買ひ取りを願ひたい、といふ譯なんです。なほ、十分、手當はしてみます。もち直せば文

句はありません。それから、お宅の犬ですがな。かまはなけれや、わたしが、一つ、鶏を追っかけないやうに仕込んであげませう。これや、わけありません。鶏と一緒に遊ばせておけばいいんです。わたしが、そばについてましてね。叱りながら馴らすんです。なにしろ、暇でぶらぶらしてるんですから……。

二見 さやうでございますか。(奥に向ひ) ねえ、パパ……。

さつきから、箸を置いて玄關の話を聴いてゐた念吉は、この時、起ち上つて出て行く。

念吉 やあ、僕、今里です。お話は伺ひました。鶏のことは承知しました。それから、犬の方は、お言葉に甘えて、さうしていただくことにしませう。

二見 ほんとに、さうしていただければ……。

念吉 しかし、その鶏は、大分弱つてるぢやありませんか。とても駄目でせう。

鬼骨 まあ、できるだけ介抱はしてみます。こちらにも御迷惑をかけないですめば、これに越したことはないんですから……。

念吉 いや、どうも……。

二見 お金ですむことなら、なんでもございませぬけれど……。ねえ、パパ、それより、あ

あおつしやつて下さるんだから、一層ベスを差上げてしまつたらどうでせう。犬はお好きでいらつしやいますか。

鬼骨 (聞えないふりをして) 今、そこで話を聞いたんですが、大分、この近邊を荒したらしいですね。犬のお蔭で、お宅の評判はともわるいですよ。ハ、ハ、ハ、。どれ、犬を兎も角、お預りして行きませう。今、をりますか。

念吉 ゐるにはゐますが、まだ夕飯も食はしてありませんから、後程、僕が連れて伺ひます。

鬼骨 それぢや、その夕食も一緒にお預りして行きませう。味噌汁の残りでも、魚の骨でもかまひませぬ。容れ物はありませう。

二見 でも、あんまり汚れてゐて……。

念吉 外側だけ拭いたらいいぢやないか。

二人は、それぞれ、犬の夕食と容れ物の心配をしはじめ。やがて、念吉は、犬を引張つて来る。二見は、古洗面器の中へ何かしらを容れて持つて来る。

二見 こんなものでよろしうございませうか。生憎、なんにもございませぬのよ。

念吉 ほんとだね。なんだ、もう少し、身のついたところはないのか。

鬼骨 (犬とその食事を受け取り) なに、かまやしませんよ、あたしが食べるんぢやないから。

彼は、そのまま、悠々と門を出て行く。

第二場

前と同じ場面。翌朝。

今里念吉は、座敷で外出の用意をしてゐる。二見は、その側で、ネクタイの釦を伸ばしてゐる。もう洋服に着かへた甲吉は、庭で三輪車を乗り廻してゐる。

二見 また泥をつけちやいやですよ。

甲吉 パパ、自動車で行くんだらう。

念吉 馬鹿言つちやいかんよ。急ぐ用事でなけれや、自動車なんかへ乗るもんぢやない。

甲吉 また早く行かないと、ライオンが牛肉をたべるとこ見られないぢやないか。

二見 上野なら、電車だつて、おんなじ時間ですよ。それより、ここへいらつしやい。はなをかんであげるから……。

甲吉 つまんないの。儉約しようと思つて、あんなこと言つてやがらあ。

二見 やがらあたあ、なんです。さうよ、儉約よ。儉約はいいことなんですよ。

甲吉 いいことなら、はじめからさう言やいいぢやないか。

念吉 こいつ、なかなかやるわい。さ、墓口は……？

この時、表から、百瀬鬼骨が、死んだ牝鶏を片手にぶら下げて現はれる。座敷の方をのぞき込んで、つかつかと庭へはいつて来る。

鬼骨 ここから御免なさい。いや、たうとう参つちましたよ。いろいろ手を盡してみたんですが、駄目でした。それぢや、お迷惑でも、これを一圓五十錢で買つて下さい。

二見 でも、さうなつたのを頂戴しても仕方がございせんから、それはそれで、よろしいやうにしてください……。ねえ、パパ、お金はお金で別に取つていただければよろしいでせう。

念吉 むろんさうさ。

鬼骨 いや、それやいけません。これでも、つぶしにすれや、いくらかになるんですからね。ただ、わたしは、代りの鶏を一羽買はうと思ひましてね。

念吉 ですから、その肉は、よろしかつたら、あなたがおあがりになつて下さい。

二見 ほんとですわ。うちの犬が殺した鶏なんぞ、こちらではいただけませんわ。

鬼骨 さうですか。そんなら仕方がありません。しかし、さうなると、お金はいただきますにいですな。

念吉 いえ、いえ、それは別問題です。ぢや、どうか、これで……一圓五十錢……。

鬼骨 弱つたなあ。いつたい、かういふ問題は、お互に注意しなへすれば、起さすにすむ問題なんですからね。わたしがこのお金をいただいて、死んだ鶏の肉を食ふとなると、損害を蒙るのは、わたしの方でなくつて、寧ろ、あなたの方ですからな。以後、誰彼となく、死んだ鶏をもつて、あなたのところへ押しかけて来ないもんでもない。それは戯談だが、お宅のベスは、うちの鶏と遊んでゐますよ。嘴で鼻の頭をつツ突かれて、あとすさりをしてゐますよ。可愛いもんです。わたしもね、年に三度は引越をする男ですが、何處へ行つても、近所といふものが五月蠅くていけない。こつちばかりぢやない、向うでもきつとさう思つてゐる。それが、いろんな機會に、いろんな形で現はれるんです。わたしは、これで新聞記者の成れの果です。社會生活といふものに、人一倍關心をもつてゐる。むろん、わたし一人の腕ではど

ろにもなりやしません、昨夜、つくづく考へました。そして、かういふことを思ひついたんです。この近所一區劃が、假りに二十軒あるとしませう。その二十軒が、それぞれ違つた様式の生活をしてゐる。それはまあいいとして、めいめいが少しも隣人のために計るといふことをしない。これは間違つてゐる。當り障りはありますが、犬なんかのこともです。自分の家の鶏が追つかけてゐるのをみたら、他所の家の鶏のことを考へて、早く、犬の飼主へそのことを知らせるやうにすれば、面倒は起らない。面倒が起つても二軒の間だけですむわけです。蔭で愚圖愚圖不平を言ふ、それも、悪戯をした犬のことだけならいいが、飼主の人身攻撃に互るやうなことを、あつちこつちへ觸れ歩く。これは怪しからんです。そこでですな。わたしの考へたといふのは、お互が胸襟を披いて、ひとつ、めいめいの苦情なり、註文なりを言ひ合ふ會合を催してですね、改善すべきことは改善する、特別の事情は特別の事情で諒解を求めるといふやうにすればです、お互に、今後、明るく、のびのびと生活ができやしないかと思ふ。如何です、異議があたりですか。

念吉　結果がよければいいですが……。

二見　氣まづい思ひをするだけぢやございませんかしら……。

鬼骨　大丈夫です。その代り見榮と利己主義を棄てなければいけません。わたしにお委せなさい。これから、すつと廻つて、意見を集めてみます。同じ近所の噂を聞くにしても、あそこの旦那つていふのは、奥さんが女學生時代の英語の先生で、學校にゐる頃から怪しかつたんだとか……（念吉と二見は、思はず顔を見合はせる）旦那も無愛想だが、奥さんと來たら、どこが偉いのか、人に遇つても自分の方から先へお辭儀をした例しがないとか、向うの子供が遊びに來れば、まあ菓子だけはおいしさうなのをと思つてやつてゐるのに、こつちの子供が向うへ行くと、しけたお煎餅しか出さないとか……。

二見　あらまあ、そんな……。たつた一度きりですよ。すむふんですわね。

鬼骨　さういふ噂は全く聞きづらいですからなあ。

二見　そんなこと言ふなら、こつちだつて言ひますわ。まだろくに齒もかたまらない宅の子供に正月のおかちんの揚げたのなんか食べさせるのは、何處の家でせうね。そんなことなら、まだようござんすわ。少し發育が遅れて、年の割に無邪氣なのをいいことにして、人のところの食事の獻立まで根掘り葉掘り訊いたりなんかするつていふのは何處の奥さんでせうね。

念吉　もういい、ママ、こゝでそんなことを言つたつてしやうがないぢやないか。それぢや、

僕は、ちよつと出かけて來ますから……また何れゆつくり……。

鬼骨 お出掛けですか。今日は日曜で、お休みでせう。それぢや、お手間は取らせません。ぢき、話をきめて來ます。

念吉 でも……。

鬼骨 いや、なんでもありません。すぐ歸つて來ます。

彼は、そこに置いてある一圓五十錢を引渡ひ、そのままあたふたと出て行く。

二見 (ぐつたりと、そこに坐り) あたし、いやんなつちやふわ。(泣く)

念吉 (甲吉の姿が見えないので) おい、甲吉君、遠くへ行くんぢやないよ。今すぐ御用がすむからね。それから、ねえ、ママ、せめて君だけはしつかりしてゐてくれ。甲吉は甲吉で、年が頭を置いてきぼりにするし、ベスはベスで、家にあるもんだけぢや氣に入らんといふし、その上、君が、僕の黙つてゐたいことをみんな喋つちまつちや、僕は立つ瀬がないよ。甲吉君！ 危い、そんなことしちや……(なるほど、甲吉が、庭の隅で三輪車の曲乗りをし損ふ) だがね、ママ、僕たちはこれまで、二人の生活だけを愉しんでゐればよかつた。(ピアノの練習曲が聞えて來る) これからは、さうは行かないよ。世間との交渉がだんだん複雑になる。周圍の

ことをいちいち氣にする必要はないが、こつちも相當、準備をしてかからなければ駄目だよ。

二見 そんなこと、わかつてますわ。

念吉 わかつてれば、それでいゝさ。鼻から涙が落ちてら。

二見 いいんですよ。(拭かうとしない)

念吉 (椽側に腰をおろし) お隣りのお嬢さんも、早くピアノが上手になつてくれるといいなあ。おい、こら、甲吉君、そんな無理なことをしたつて駄目だよ。それより、ここへ來給へ。パパがまた、試験をしてやる。

甲吉は、しぶしぶ父親のそばへ行く。

念吉 (甲吉の肩を兩手で抑へ) 甲吉君のパパはなんていふ名前だ？

甲吉 今里念吉。

念吉 ママは？

甲吉 今里二見。

念吉 パパの商賣は？

甲吉 商賣つて？

念吉 商賣つていふのはね、どうしてお金を儲けるかつていふことだ。

甲吉 ママに貰ふんだ。

念吉 さうか。そのママのお金は、何處からはいつて来る？

甲吉 袋へ入れて、パパがもつて来るよ。

念吉 その袋へはいつたお金は、パパが何處から持つて来る？

甲吉 知らないやあ。

念吉 それはね、パパが毎日學校で英語を教へて、そのお駄賃に貰ふんだ。

甲吉 毎日貰ふの？

念吉 うん、一月目毎に貰ふんだ。幾ら貰ふかといふと……。

二見 およしなさいよ、そんなこと教へるの。

念吉 どうして？ 教へとした方がいいよ

二見 また近所がうるさいぢやありませんか。

念吉 なにがうるさい。幾ら貰つてるかといふと……。

二見 およしなさいつてば……。そんなこと、子供におつしやるなら、あたし、この家にや
ゐませんよ。

念吉 また引越すのか。

二見 さうぢやありませんよ。あたし、一人で出て行きますよ。

念吉 ああ、さうか。そいぢや、よさう。いいか、甲吉君、ママがあいふから、幾らだと
いふことは教へないが、パパは決してお金持ちやない。君は、大きくなつたら、働いて、自
分で御飯をたべて行かなければならん。自分で着物も買はなれやならん。

甲吉 肝油ドロップも自分で買ふの？

念吉 さうさ。ではね、君は、大きくなつたら、なにになる？

甲吉 こないだ、ケイチやんとこの小母さんも、さう言つて訊いたよ。

念吉 なんて返事をした。

甲吉 黙つててやつた。さうしたら、ケイチやんがそばから、屑屋になるんだらうつて言つ
たよ。

念吉 どうして？

甲吉 だつて、屑屋が通るたびに、うちのママが「屑屋さん」つて呼ぶんだもの。みんな知つてるよ。

二見 それはね、甲ちゃん、うちぢや、いろんな場づめのものを使ふでせう。だから、すぐに空場がたまるのよ。それと、パパが外國の新聞をいくつも……。

念吉 うん、だから、いゝさ。

二見 なんていふ子供たちでせうね。

念吉 屑屋になるつて言はれて、君は、口惜しかつたか？

甲吉 馴れてるから平氣だい。

念吉 初めは癪にさはつたか？

甲吉 ほんとに、僕、なにになるの？

念吉 君の好きなものになるさ。屑屋だつてかまはないよ。かまはないどころぢやない。さつきママが言つたとほり、空場や古新聞がうんと溜つて御覽。どこの家でも始末に困る。埃のたまつた空場が、すらりと臺所の隅に並んでゐたり、蟲のついた古新聞が、押入の中へぎつしりつまつてゐたりすると、第一、からだによくない。次に、家の中が亂雑になる。第三

に、無駄だ。場や新聞は、ほかへもつて行けば役に立つもんなんだ。屑屋がゐてくれなけりやどうすることもできない。屑屋は、乞食とは違ふ。ちやんとお金を出して、そいつを買つてつてくれるんだ。だから、屑屋つていふものは、四ついいことをしてるわけだ。第一に……。

二見 (笑ひながら) 甲ちゃん、パパの言ふことなんか聴かないで、こつちへいらつしやい。

ママがいゝお話をしあけるから。

甲吉 動物園見に行かないの。

二見 パパの御用がすんでから……。それまで上へ上つてらつしやい。帽子はどこへ脱いだの。

念吉 (手に持った甲吉の帽子を出し) ここへ脱いだ。僕は、こいつに學問を仕込むことは諦めた。だから、學校へなんかはいりたがらないうちに、實地の職業教育を受けさせようと思ふんだ。それには、今から、學問尊重の風を養つてはならない。また、所謂立身出世の夢をみさしてはならないと思ふ。君も、そのつもりでゐてくれ。

二見 これで、まだどうなるかわかるもんですか。(しなだれかかる甲吉を、かばふやうに抱き

締める

この時、郵便配達がやって来る。

配達 今里さん、集金郵便です。

念吉 どちら、ここへくれ給へ。

配達 (庭へはいつて来る)

念吉 校友會費を取りに来たよ。

二見 何處んです。

念吉 君の分だよ。

二見 明後日来て頂戴な。

配達 明後日ついていふなあ、一昨日のこつてすか。もうこれで二度目ですからね。よござんす。返してやりませう。

二見 ちよつと待つて……。何時かのはあんただつたのね。それぢや、パパ、そつから三圓出しといて下さいな。

念吉 (訝しげに) こつから……？ 僕んとつからかい。よし来た。はい、三圓……。

郵便配達去る。

念吉 四圓八十錢から四圓五十錢引くと三十錢……。三十錢ぢや、電車にも乗れないや。

二見 甲吉は、ちやうど、眠つちまひましたわ。

念吉 また眠つたのか。待ちくたびれたな。(問) 君、隣へ行つて、あやまつて来い。

二見 だつて、鶏がゐなくなつたから、ベスのせむだとは限りませんわ。猫だつてなんだつてゐるんですもの。

念吉 ベスのせむだと思つてるんだから、あやまつて来い。

二見 いやですよ。お隣の犬だつて、何時かのやうなことがあつたんですわ。こつちは、それを黙つてるんですわ。

念吉 しかし、覚えてだけはゐるか。

甲吉 (囁言のやうに) パパ、動物園はまだ遠いの？

念吉 いや、もうぢきだ。そうら、向うに門が見える。象の啼き聲が聞えるだらう。まだ起きないでいい。

二見 ほんとだわ、ペリカンも啼いてるわ。眠りながら笑つてますよ。

念吉 O I miserable of happy !

甲吉 (何かむにやむにや言ふ)

念吉 なんて言つてる？

二見 ライオン、ライオンですつて……。

念吉 さうだ、ライオンだ。ライオンが牛肉をたべてる。ライオンは、小便をひつかけるから、そばへ寄るなと書いてある。これは滑稽だ。檻の中へ入れられた猛獣の悲哀だ。これでも昔は、阿弗利加の沙漠で、縞馬の腹を引裂いてゐたんだ。パパは何時か、佛蘭西の詩人の書いた、獅子と虎との闘ひの詩を読んだことがある。むろん、獅子が勝つた。河の水が、虎の血で、真赤に染まるところが書いてあつた。甲吉君は、ある勇敢な探險家が、ピストル一挺で大きなライオンを撃ち止めた話を知つてるかい？ その探險家は、森の中で、不意に疊一疊敷ぐらゐのライオンに出くはしたんだ。鐵砲を肩から外す暇がない。ライオンは、もう大きな口をあけて、眼の前五六歩のところを迫つてゐる。やうやく、ポケットの中へ手を入れたと思ふ瞬間、ライオンは、後脚を蹴つて、躍りかかつた。探險家の片手が、ライオンの口の中へはいつた。グワン！

一人の男の子が庭へはいつて来る。

念吉 甲吉君は、今、眠てるよ。

男の子 遊びに来たんぢやないよ。手紙を持って来たんだよ。

念吉 何の手紙……？

男の子 その小父さんに頼まれたんだ。

念吉 (手紙を受け取り、封を開く) 回状だね。なんだ、これや……。 (讀み上げる)

一、近隣の平和親善を目的とする一夕の會合を催したく、奮つて御出席を希望します。

一、會合の時刻は、本日午後七時。

一、場所は、八〇二番地今里念吉氏方庭園。

一、會費なし。

發起人 百瀬鬼骨、多胡鶴人。

二見 なに、それは……。

念吉 かういふもんだ。八〇二番地今里念吉氏方庭園か……。この庭園のことだらうな。

第三場

同じ場面。夕刻。

今里念吉は、椽側を行ったり来たりしてゐる。二見は、鏡臺に向つて化粧をしてゐる。甲吉は、紙で折つた胃をかぶり、帯にハタキを差し、蚊にかまれた脚を掻いてゐる。すると、一人の男が、門前に来て立ち止る。中をのぞき込む。陸軍歩兵大尉島貫である。そこへ、また、一人やつて来る。興信所所員片倉州蔵である。何かこそ話をする。途方に暮れたやうな風をする。そこへ、今度は、三人連れの學生風の男がやつて来る。平大野球部選手越水とその仲間である。

念吉は、刻々數を増す敵勢に、孤城の運命を案ずる如く、椽側の端に仁王立となり、靴を決して門外を睨んでゐる。やがて、もう一人、續いて二三人。念吉は、肩で呼吸をしはじめ。

念吉　おい、ママ、君は、今のうち、甲吉を連れて、買物にでもなんでも出掛け給へ。

二見　（夫の只ならぬ様子に、これも椽側へ出て外を見る。今更のやうに驚く。が）いいえ、あたしも家にゐますわ。パパ一人を見殺しにはできませんわ。女ながらも、飽くまで闘つてみせますわ。

念吉　ナイフを貸せ、ナイフを……。

二見　ナイフは學校へ置いてらしたんでせう。

念吉　そいぢや、火箸でもいい。長いやつを貸せ。

が、もう遅い。禿頭の隠居多胡某を先頭に、門外の群衆は、ぞろぞろと庭の中に闖入する。念吉は、思はず四五歩、後にさがる。二見と甲吉は、座敷の隅に追ひやられる。

多胡　大分お揃ひになつたやうですから、ひとつ……。こちらから、よろしいんですか？

念吉　（黙つて身構へる）

多胡　わたくしは、お向ひの多胡でございます。御無沙汰をいたしてをります。今日はまた、飛んだお厄介で……。さ、みなさん、大勢ですから、なるほど露天の方がいゝでせう。わたくしは、年寄ですから、御免下さい。（彼はさう言つて、一人、椽側に腰をかける）

島貫　自分は、突然で、よく御趣旨がわからないんであります……。あ、自分は、參謀本部

に勤めてをるかういふもんであります。(名刺を出す)

念吉 (油断を見せず、その名刺を受け取る)

越水 僕は、名刺を持ちませんが、その平大野球部の合宿所にゐる越水といふもんです。これが、クマソ、そつちが、ヤモリです。どうせ、ほんとの名前を言つたつてしやうがねえや。

州蔵 わたくしは、昨日家内が伺つた筈ですが、幼稚園のそばに住んでをります片倉でございます。今日は是非出るといふお話なもんでございますから、もうぢき客が来ることになつてをるんでございますが、ちよつと外して参りましたやうな次第で……。犬はどちらへか参りましたんですか。(犬小屋のまはりを探す)

後から後から、門をはいつて来るものがある。最後に、百瀬鬼骨が、大串葉繪と共に現はれる。

鬼骨 女主人は女が出ることになつてゐます。さあ、どうぞ……。そんな遠慮をしてぢやいけません。やあ、みなさん、遅くなりました。二十三戸のうち、七戸は差支へがあつて、今回は缺席、残り十六戸の方々がお集り下さいました。有望な成績です。中には、一戸で三人ま

で御出席下さつた方がある。發起者として感謝する次第です。では、わたしから、もう一度、この會合の趣旨を申し上げます。(咳拂ひをする) ええ、最初に、この會合を思ひ立ちました動機についてお話をすれば、實は、今日、會合の場所を御提供願つた當今里家の愛犬ベスがであります、ふとした迷ひから、近所の鶏を追ひまはすやうになつた。これはであります、獵犬などにはよくあることでありまして、獵犬でなくても、犬の青年期と申しますか、つまり、元氣旺盛な時代には、何か生き物を弄びたいといふ慾望が盛んである。そこで鶏を追つかけた。追つかけてみると面白い。つひ、無我夢中で食ひつく。これはたまたま、人間にもその例があることでありまして、深く咎むべきではない。しかし、食ひつかれた鶏が、そのために一命を落とすといふことになる、問題が面倒であります。今里家の愛犬ベスは、遺憾ながら、この種の問題を惹き起したのであります。奥さん、水を一杯頂戴。

二見は、しかたなしに、水をコップに汲んで差出す。もう、外は眞暗である。だんだん縁側に腰をおろすものが出来て来る。

鬼骨 恐れ入ります。ええと、うん、この種の問題を再三惹き起したのであります。折角思ふところあつて飼つてゐる鶏を、むざむざ犬に噛み殺されるやうでは、飼つてゐる方でも迷

惑でありますし、それにまたいちいち辨償をさせられては犬の飼主も堪らない。そこはお互である。めいめい注意をしなくてはならない。その方法は、いくらでもあるんであります。

片倉　ちよつと、お話中ですが、今の鶏のことでございますがね。

鬼骨　お待ちなさい。あとで質問を許します。そこでです、これは単に金銭で解決のつく問題であります。中には、さうでない問題がいくらかもある。

片倉　實は、その、手前共では……。

鬼骨　黙つて……。さうでない問題がいくらかもある。隣近所が、お互に、知らず識らず迷惑をかけ、それをまた、雙方苦情も言へず、蔭でぶつぶつ言つてゐるといふやうな場合が度々ある。これがなかなか、恐ろしいんであります。あらぬ噂となり、不公平な評判となり、嫉視反目、この界限、住むに堪へずといふことになる。かくの如きは、お五文明人の慎しみ戒しむべきことであるのみならず、さなきだに世智辛き時代を、一層暗黒に導くものだと考へるのであります。これはひとつ、われわれの力で、われわれの恵まれた智力で、なんとか解決をしなければならぬと、不肖、私が、僭越を願みず、ここに、近隣平和會議の提案をいたした次第であります。

拍手をするものがある。念吉は、何時の間にか椽側の柱にもたれて、話を傾聴してゐる。

鬼骨　つきましては、この會議に列席する代表の範囲であります。これは私の獨断で、當今里家を中心とする一區劃に限りました。御承知の通り、この界限は、もと水田を埋め立てた土地でありまして、最近家が建つたばかりの、謂はゞオアシスの如き孤立部落であります。地所は大部分、あそこに見えますあの森、蒼々たる千古不伐の森に取巻かれた麥倉一家の所有であります。昔日の水呑百姓は、今日、娘を女子大學に通はせ、妾に麻雀俱樂部をさせてゐる。

また拍手が起る。念吉はしやがんでしまふ。

鬼骨　われわれは、不平を數へればきりが無い。先づ、小さな不平から片づけて行きませう。如何です、議事の進行を計るために議長を指名しては……。「自分でやれ」といふ聲がかゝる。皆さん、異議ありませんか。なければ、わたしがやります。それではと、お名前をいちいち覚えてをりませんから、そちらから順々に自己紹介をなすつた上で、議題となるべき件を御提出願ふことにしませう。(椽側の上り、二見に向ひ)奥さん、ちよつと、机と紙と鉛筆を拜借。

二見　　パパ、紙はどんなのにしませう。(彼女はさう言つて、自分の机を縁側に運んで来る。この間に、人々は縁側へぎつしり並んで腰をおろす)

鬼骨　　答案紙の残りかなんかありませんか。

二見　　そんなんでなく、ちやんとした紙でございます。(彼女は、野紙を一帖もつて来る)

州藏　　少し急ぎますから、手前から先に申上げます。手前は、片倉と申すもんです。先程、百瀬さんからお話のございました犬の被害者の一人でございます。この席で申上げるのも如何かと存じますが、一概に鶏を飼ふと申しますと、なにかかう、懲得でやつてゐるやうに聞えますが、手前どもでは、その……。

鬼骨　　なるべく簡単に願ひます。結論を先におつしやつて頂けませんか。

州藏　　はい。結論は、つまり、どなた様でも、犬は、なるべく、鎖に繋いどいていただきたく思いますので、これは、なに、鶏ばかりでなく、夜道などいたしますと、不意に曲り角で吠えつかれるやうなことがございまして、それにまた……。

鬼骨　　すると、何處の家でも、犬は鎖に繋いで置けといふ提案ですね。

州藏　　はい。しかし、まあ、特に、鶏を追ひかけますやうな犬は……。

鬼骨　　では、鶏を追ふ犬はと限りますか？

州藏　　みなさん、如何でございます。

聲　　わたしのところには、鶏も犬も飼つてありますが、犬を鎖へ繋ぐといふことは、絶対に反対です。今里さんにはお氣の毒ですが、これは、現行犯に基いて、危険な犬だけを適宜に処分すればいいと考へます。

鬼骨　　あなたは、尾畑さんでしたな。

尾畑　　さうです。

鬼骨　　では、尾畑君の提議に賛成の御方は恐れ入りますが……。

二見　　(膝を乗り出し) それぢや、あたくしにも言はしていただきます。

念吉　　おい、ママ。

鬼骨　　なにか、意見がおりますか。

二見　　人のうちの犬のことは、平氣でそんなことがおつしやれるでせうけれど、お宅の犬が、先達、これの晩のおかずにはわざわざ買つといた平目の切身を、うつかりしてゐる間に銜へてつたことは御存じでございますまい。さういふ犬も、鎖で繋いどいていたときたうございますわ。

それから、片倉さんとやらに申上げますけど……。

鬼骨 反対意見もあるやうですから、こゝで採決を取ることになります。先づ、尾畑君の意見に賛成の御方は、手を舉げて下さい。よく見えませんか、しつかり舉げて下さい。(闇をすかしながら) 一、二、三、四、五、六、七……。はい。では、今里夫人の提案、即ち、鶏のみならす、魚の切身を銜へて行つた犬をも含める意見に賛成の方は……？ (見廻して) 奥さんお一人ですか。その他の方は、どういふ御意見ですか。(誰も答へない) どんな犬でも、鎖に繋ぐといふことは絶対に不賛成だとおつしやるんですか。(「不賛成だ」と答へるものがある) それぢや、その方は手を舉げて下さい。(他の全部が手を舉げる、念吉もその一人である。) 一、二、三、四、五、六、七、八……。はい。では、尾畑案、及び、今里夫人案は否決されました。(拍手) 次は、どなたですか。

州藏 手前、少し急ぎますんですが、もう引取りましてもよろしうございませうか。

鬼骨 いけません。次は、それぢや、多胡さん……。

多胡 わたくしは隠居の分際で、御近所への不平など毛頭ございせんが、あの本道からこちらへ曲ります道でございますな。あの道がどうも、雨降りなどには……。

鬼骨 お待ちなさい。それは、地主か役場へ掛け合ひませう。では、お次の黒林さん……。

黒林 先程、犬の問題がでしたが、議長に御注意申上げたいことがある。最初、片倉さんが提議されたのは、飼犬は悉く鎖に繋ぐべしといふことであつた。議長は、何故に、先づ、この提案に對して採決を求められなかつたか。重大な手落であると思ふ。今里夫人の御意見も、恐らく、これに含めらるべきものだと思はるが、如何です。

鬼骨 では、今の黒林案に賛成の方は……？ (「おれや、どつちでもいゝや」といふものがある)

一、二、三、四、五、六、七……。否決であります。

黒林 手を幾度も舉げる人がある。

鬼骨 否決であります。えゝと、次は、島貫君……。

島貫 自分は、外に不満はありませんが、ピアノの練習は時間を決めてやつていただきたい。出来れば晝間だけといふことに願ひたいのであります。それから、序に申上げて置きますが、何處かの犬が、先達、拙宅の掃溜へ、古靴を片一方銜へておいて行きました。もう五六度底を替へたやうな靴でしたから、そのまゝにしておきましたが、みなさん、玄關の履物なんかは、御用心なさる方がいと思ひます。これで終り。

二見 あ、その靴は、もしや、赤革の、ボツボツの模様のある編上ぢやございませんでしたか。

島貫 そのボツボツも、泥でおほかたみえないくらゐでした。

二見 あ、それぢや、黒林さんのお宅のですわ。

黒林 いゝや、なに、わたしのとこのは、出て来ました。

二見 まあ、それで安心いたしました。ほんとに安心いたしましたわ。(鬼骨に)では、どうぞ……。みなさん、お茶も差上げなくてよろしうございませうか。

鬼骨 なに、結構です。それでは、「ピアノは時間を決めて練習すべし」この案に賛成の方は……？ (八人手を挙げる。二見は挙げるが念吉は挙げる) 多数と認めます。では、心當りの方はさう實行なさるやうに……。次は、越水君。

越水 畑に肥料をやるのはいいが、臭くつてやりきれない。あれをなんとかして貰へんのですか。僕んところは、前うしろに畑があるんだから閉口なんだ。なあ、おいクマソ……。

クマソ どんな畑かと思へや、菜葉が二行半ばかりと……。

鬼骨 レッ！ 畑には臭ひのしない肥料をやるといふ案に賛成の方は……？ (越水とその仲

間二人だけ手を挙げる)

越水 これだけか。鼻の悪い奴ばかり揃つてやがらあ。

鬼骨 臭いのが君達んところへは、はいりいいんだらう。

越水 なに？ 今の言葉を取消せ。取消さんか？

鬼骨 唯今の失言は取消します。次は……。

越水 まだあるぞ。おれたちは、晝間みんな練習に出るもんだから、近所の餓鬼共が其處へ上り込んで、菓子箱でもなんでも空にしちまふんだ。親たち、ちつと取締つてくれ。

多胡 家を明けるときは、鍵をかけて出るんですよ。第一、用心がわるいですぜ。

越水 別に取られるやうなものも、置いてないからさ。

多胡 なにを言つてるのかわけがわからん。

越水 禿、黙れ。てめえの孫も、その一人ぢやねえか。

多胡 生憎、孫は北海道にゐる。菓子をつまむなあ、子供と限るまい。

越水 てめえか。

多胡 さ、議長、議事を進行させたらどうです。

鬼骨　それでは、唯今の議案は、「家を明ける時は鍵をかけること」でしたな。

越水　さうぢやない。

鬼骨　賛成の方は……？（誰も手を舉げない）おや、賛成の方はありませんか。

多胡　そんなことは決議するまでもないでせう。鍵をかけないのが馬鹿なんだから……。

越水　なにを！　こいつ、殴れ！

逃げようとする多胡を引捕へ、野球部選手三人は競つて拳固をふるふ。この四人の一塊が、揉みつかまれつ門外に出るのを待つて、

鬼骨　守衛がをりませんので、遺憾ながら、議場の整理は、自然の成行に委せるより外ありません。休憩の必要がありますか。ないと認めます。それでは、その次、あなた……。いいえ、あなた、角帯のお方……。

兩角　僕は、兩角です。さつき犬の問題がでしたが、僕は、近所の鶏に迷惑をしてゐます。人の家の庭へはいり込んで草花の芽をほじくる。それから、黙つてゐると、椽側へ上つて糞をして行きます。書齋のそばへ来て、けたたましい聲を立てます。追つ拂つてもすぐやつて来る。僕は、そのために神経衰弱にかかりました。夜、鶏に腹をつつ突かれる夢をみる。

女房の顔が牝鶏の顔に似て来るんです。（賛成といふものがある）

鬼骨　まだまだ。

兩角　僕は、鶏屋以外、鶏を飼ふことを禁じる案を提出します。

甲吉は、さつきの騒動以來、念吉の膝に抱かれてゐるが、この頃から、ぼつぼつ、頭を父親の胸に埋めて眠りはじめる。

鬼骨　これは大分議論があるでせう。

尾畑　さういふ難題を出される前に、御自分が、鶏のゐない町へ引越されたらどうですか。

（賛成といふものがある）

兩角　鶏のゐない町……それは久しく僕の探し求めてゐる町です（「丸の内へ行け」といふものがある）鶏のゐないところには微菌が充滿してゐます。

岩城　兩角さんに申上げますが、鶏、鶏とおつしやるのは、多分わたしのところの鶏を指しておつしやるのでせうが、なるほど、御尤もの點もあると思ひますから、將來、垣根を越えないやうに、なんとか設備をすることにしませう。しかし、この機會に希望してをきますが、お宅の下水は、みんなわたくしの家の庭に流れ込んで来るやうになつてゐる。あれは、早速、

工事をしていただきたい。穴を掘ればなんでもないのですから……。

藤巻 横から口を出すやうですが、岩城さん、あなたのところの流しの水も、おほかたわたくしの屋敷へ流れて来るやうになつてをりますが、あれは、どういふもんでせう。

岩城 いや、そんな筈はありません。わたしのところは、ちやんと吸ひ込み式になつてゐます。ただ、兩角さんの方から流れて来るやつだけは、面倒ですから、お宅の方へ溝をつけました。ただ、それだけです。

藤巻 ただそれだけは有難くないですなあ。

鬼骨 (鉛筆の尻で机を叩き) さうしますと、さつきの兩角案は如何いたしませう。兩角岩城兩家の問題としますか、一般に採決を取りますか。(「その必要なし」と言ふもの一人。「採決を取れ」と應ずるもの二人) その必要なしと認めます。(「議長不公平」と言ふものがある) それなら、採決を取ります。鶏を飼ふことを禁ずる案に賛成の方……。一、二、三、四……。(二見はその一人である) 少数と認めます。鶏は飼つて差支へありません。その次、櫛谷君……。

藤巻 まだ、下水の問題が解決されてゐません。

鬼骨 隣から流し込まれた汚水は、そのまた隣りへ流し込まず、その一軒を喰ひ止めるべき

こと、これについて、諸君……？。

兩角 賛成。

鬼骨 少し急ぎませう。(下を向いたまゝ) 賛成、多数と認めます。次は、今里君……。

今里 (やうやく我に歸り、甲吉を抱いて蒲團の上に寝かせ) かういふ會合は、日曜日に開かないやうにしていたきたいです。日曜日でもいいから、誰かほかの人の家でやつて貰ひたい。僕は、もちろん缺席します。

二見 もし、パパが、あたくしを代理に出してくれたら、あたくしは、みなさんにかう申し上げるつもりです。——お互に蔭口は慎しませうつて……。あたくしが、どなたに會つても、先へお辭儀をしないなんて、どこの奥さんがおつしやつたんでせうね。

葉繪 あたくしが申しました。

二見 あら……。

葉繪 御存じなかつたんですか。百瀬さんの饒舌は中途半端なんですのね。

鬼骨 その代り、あなたのことを、誰のことかわからないやうに褒めておきましたよ。なに、さういふことは、あなたばかりが言つてるんぢやない。第一、尾畑さんの奥さんもさう言つ

てた。

尾畑 家内はなんと申したか知りません。しかし、宅の家内が洋装をして出掛けるのをみて、人差指に帽子を被せたやうだなんておつしやつたのはどなたでせう。

二見 それは、あたくしぢやございません。パパでございます。あたくしは、ただ笑つただけでございます。どこからそんなことがお耳にはいりました？

尾畑 お宅の坊つちやんが、なんでもおつしやる。

鬼骨 (鉛筆で机をたゝき) それでは、人の噂は、子供の前でするな、この提案を、わたしからいたします。これに賛成の方……。

この時、何處かでけたたましい鶏の啼き聲が起る。それは、犬に追ひかけられて逃げ惑ふ鶏の悲鳴に違ひない。片倉州藏が先づ門外に飛び出す。尾畑がこれに續く。

百瀬鬼骨は、しばらく耳をすましてゐたが、いきなり庭に飛び降り、一目散に駆け出す。

鬼骨 (門の外に出るや) こら、ペス！ ペス！ シツ！ ペス！ 今里さん、ペスを……。

今里さん……早く……。こらッ！ しッ！

一同、外へ出る。犬の後を追ふもの、「うし、うし」とけしかけるもの、さまざま。念吉は、

椽側で、ぼんやり、眼をつぶり、二見は、甲吉の寝顔を見つめてゐる。屋外の暗く騒々しいのに引替へ、家の中は、電燈の明るい光の下に静まり返つてゐる。

——幕——

淺間山

浅間山の麓

萱の密生した廣漠たる原野の中に、白樺、落葉松などの疎林が點在し、土地を區劃するための道路が、燒石の地肌をみせて縦横に延びてゐる。
緩やかな斜面に沿つて、粗末な小舎が^{カッテージ}一棟。斜面の盡きるあたりに、水量の乏しい溪流。温泉鑿掘のための^堰が、その岸に立つてゐる。

この物語の中に現はれる人物

丹羽 州太	その娘
同 二葉	郵便局長
時田 思文	その娘
同 則子	州太と同棲してゐる女
小瀬川 とね	州太の助手
新井 務	人夫頭
菰原 獻作	二葉の婚約者
青木 利元	
郵便配達夫	
その他人夫大勢	

五月の末——晝すぎ。

カッター
小舎の入口。

正面のテラスに、藤椅子が一脚出してあり、窓越しに事務所風の部屋の内部が見える。

郵便局長時田思文（五十三）が自轉車を押しながら現はれる。テラスに上り、窓から部屋の中をのぞきこむ。

176

時田　なんだ、だあれもゐないのか。（入口の戸を開け）おとねさん、みんな留守かい。（返事がないので、いつ時躊躇してゐるが、やがて、テラスの上を歩きまはる。急に女の聲を真似て）おや、お珍しい。昨夜もあなたのお噂をしてたところですよ。（椅子にかけ、調子を變へ）わしのお噂をかね。（苦りきつて）ちえッ！　それがお世辭かい。（窓の中に、さも誰かゐる、それに話しかけるやうに）時に、大將、温泉の方はどうです。ちつとは、熱い湯が出ますかい。出る。よ

ろしい。わしも、五百坪ばかり、土地を分けといて貰はうかな。坪貳圓として、十圓づつの月賦ならよからう。

入口の窓が開く。小瀬川とね（三十二）が顔を出す。

とね　おや、お珍しい。何時いらしたの。

時田　わしが来る時は、みんなどつかへ隠れてるのかね。

とね　あんた、お一人……？　變だね。今、話聲が聞えたと思つたけれど、耳のせゐか知ら

……。ここへ来てから、よくそんなことがあるんですよ。静かすぎるからでせうね。

時田　静かすぎる、それやほんとだ。山鳩の聲にでも返事をするつていふのがこの土地の笑ひ話だ。お前さんも、よく辛抱をするぢやないか。

とね　決心ひとつですね。まあ、申へはいつて一服お喫ひなさいまし。

時田　今日はまた忙しいだらう。二葉さんは、やつぱり二時の下りかね。

とね　よく御存じですね。

時田　郵便局をやつとつて、そんなことがわからんでどうする。おい、變な顔するもんぢやない。中は見ないだつて、手紙の來かたでわかるよ。からだの具合でも悪いのかな。

177

とね さあ、どうですか。

時田 かう言つちやなんだが、お前さんからすれや、ちつと具合が悪いな。娘さんの手前、萬事、今迄通りつていふわけにも行くまい。大將はどうするつもりかしら……。

とね あたしや、どうだつていゝんですよ。ゐてわるけれや、歸るところぐらゐあるんですか
ら……。

時田 それやさうさ。待つてる人だつてあらうさ。小諸のおとねさんつて言や、わしや、子供の時から名前を聞かされてゐたよ。

とね (笑つて) さうですか。(へしんみり) 今の若い人には、丸つきり、かういふ苦勞はわからないでせうからね。(問) 旦那は、この間うちから、二葉二葉つて、それや大變なんですよ。
(問) その娘さんつていふ人が、家ん中をやつてくれさへすれや、あたしは、まあ、用のないからだですもの。

時田 (わざと素氣なく) そこんところは、わしどもにやわからん。

とね なんか急ぎの御用ぢやないんですか。

時田 むどころはわかつてるのかい。

とね 川下に、また新しく湯の出るところがみつかつたらしいんですよ。今日は、そこでせうと思ひます。

時田 今掘つてるところは駄目かね。

とね その日その日で、わからないんですよ。雲をつかむやうな話ですわ。

時田 この夏までにや、なんとかしたいものだがなあ。

とね 二葉さんつていふのは、ずるぶん、しつかりした娘さんらしいですね。

時田 らしいね。

とね 寫眞でみると器量もいいし……。

時田 うちの娘も會ひたがつてゐるつて、さう言つておくれよ。なにしろ、こんなところで、友達はなし、お互、話相手にはなるだらう。

とね ほんとに、お宅のお嬢さんもお氣の毒ですわね。

時田 なに、あれはあれでいいのさ。子供がゐれば、亭主に死なれても、存外平氣なもんだね。ただ東京へだけは、もう一度出てみたいつて言つてるよ。どうにもならん話だがね。

この時、丹羽州太(五十)が、四五人の男を従へて歸つて来る。

州太 時田さん、今度こそ掘り當てたよ。

時田 はあ。

州太 地下三尺で、もう三十八度といふ温度です。その邊の砂は、硫黄の結晶で眞黄色だ。川の水からは湯氣が立つて、魚があふ向けになつて浮いてるですよ。

時田 この前もさうだつたね。

州太 いや。この前のところなんか、硫黄の分量だけでも比較にならない。(男の一人に)おい、新井、ここへ砂を出してみせろ。

新井務(三十)は、空堀につめた砂を紙の上にひろげる。

州太 あ、さうさう。(時計を出して) 獻作、お前、早く荷馬車の支度をして、驛へ行つてくれ。急がんと間に合はんぞ。

菰原獻作(四十五)は、麥藁帽を脱いで頭を下げる。それから、とねの方に近づき、

獻作 そいぢや、車に敷く座布団をお貸しなすつて……。

とね 痛いといけないから、二三枚持つてくといゝわ。(奥へはいる)

州太 (時田に) どうです。見事です。

時田 見事には見事だが、問題は、湯が出るか出ないかだ。まあ、しかし、希望はもてるね。

州太 希望どころぢやない。これこそ事實といふやつです。(急に思ひ出して) おい、新井、

昨日の杭打ちを續けてやれ。道路に沿つたところを、みんな片づける。三人も連れて行けばいいだらう。

新井は、そこにゐる男たちを連れて去る。とねが座蒲團をもつて出て来る。獻作、それを受け取る。

獻作 旦那はおいでになりませんか。

州太 そんな暇はない。お前一人で大概わかるだらう。若い娘が、さう幾人もこんなところへ降りる筈がないよ。

獻作去る。とねが、その後を見送る。

州太 おい、そんなところに立つてないで、早く、ビールでも出したらどうだ。

とね ビールはもうみんなになりましたけれど……サイダーぢやいけませんか？

時田 わしはなんでも結構。(間)だが、どつちみち、この夏の間には合はないね。

州太 (とねに) わしには水をいつばい……。 (とね去る) この夏は、まあ、土地を見せるだけ

にして置くんです。かういふ仕事は、あせつちやいかんです。なにしろ、もうちつと景氣が出なければ……。

時田 おほきに……。だが、こいつは當てにならないしね。

州太 それがですよ。温泉が出ると出ないとは、大變な違ひですからね。なに、いよいよ温泉が出るつていふことになれや、これこそ、輕井澤と草津とをひと所に集めたやうなものでせう。

時田 輕井澤はとにかく、草津の湯つてものは、さう何處からでも出るもんぢやなしね。

州太 さうですとも。これで、いろいろ計畫をしてゐるんですが、日本で初めての試みとして、あの山のスロープを利用して、グライダーをやつてみようと思ふんです。

時田 なんだね、それは……。

州太 發動機無しの飛行機ですよ。夏のスポーツとしては絶好のもんです。

時田 それもいゝが、先づ土地を賣るんだね。そして、金持ちをうんと吸収しなさい。金持ちといふもんは、何かつていふと、手紙だ、電報だ。今の調子だと、切手代の上りが、縣の三等局をひつくるめて、びりから二番目だよ。

州太 どうも、困るのは、いろいろ逆宣傳をする奴がゐることです。淺間の爆發なんて、新聞も大袈裟に書きますからね。

時田 それもさうだが、あんたと日正さんとの間が面白くなつて、向うぢや、この土地へ金を注ぎ込むことに、そろそろ嫌氣がさし出してるつていふやうな噂を聞いたが、そんなことはあるまいね。

州太 まあ、わたしからは、なんにも言はずに置ませう（暗い顔をする）人の金で仕事をする人間の苦勞も察して下さい。

とねがサイダーを盆にのせて来る。

とね どうです、中におはいりになつちや……。

州太 出資者の日正君にも、よくこの話はしてあるんですが、わたしも、これが自分の最後の仕事だと思つてゐますし、これから先十年、いくら金を儲けてみたくら知れてゐますからね。それより、幾分でも、特色のある事業として、世間にも認められるやうなことがしたいんです。

時田 （とねに）そこへ置いといて下さい。勝手にいただくから……。とね、窓の上に盆を置い

て去る)金といふもんは儲けられるだけ儲けようとしなけりや、結局、損をすることになる。あんたの言ふことはよくわかるが、棄てる金があるんでなけりや、人のための仕事なんて、まあ、できつこないね。

州太　それも理窟です。わたしは、これまで、いろんな仕事に手を出して、一つも、満足な結果を得てゐない。あせればあせるほど蹉跎だらけです。一生、金の後を追ひまはしてゐるやうなもんでした。これで、娘の將來さへ安心ができるやうにしておけば、あとは、世間の老人並に、花いちぢりかなんかしてゐればいいんです。

時田　いやに悟つたやうなことを言ひなさるが、あんなの顔には、まだ、野心勃勃々と書いてある。山で言へば火山さ。油断はならないよ。

州太　さうでせうか。(笑ひながら)まあしかし、さう見えても一向差支へはありませぬがね。

時田　雪平の上には、今年もまた五十軒から別荘が殖えるつてね。

州太　法經大學村でせう、あそこのシステムもいゝにはいゝが、わたしはわたしのシステムでやりますよ。あれの眞似をしたと思はれるのがいやですからね。

時田　あ、さうさう、序だから、郵便を持つて來た。日正さんからもなんかあつたつけ。(郵便物を渡す)

州太　(いちいち裏返して見て、そのうちの一通を開封する)

時田　日正さんもしばらく見えないが、どうしてゐなさるかしら……。

州太　(それには答へず、黙讀を続ける)

時田　(手持ち無沙汰さうに立ち上り)おや、今日は、煙がまるで出てない。またひと暴れするんぢやないかな。

州太　……。

時田　今年の山開きには、わしも久し振りて登つてみようと思つとるんだが……。

州太　……。

時田　時に、この前頼んどいた石楠花は、まだ手にはいらんかね。

州太　電報を一つ打ちたいんだが、歸りに頼みます。

時田　日正さんへかね。よろしい。文句だけ言ひなさい。住所はわかつとる。

州太　ちよつと書きませう。

時田 簡単なことなら覚えてるよ。「オンセンデクスグコイ」かね。

州太 (黙って部屋にはいり、頼信紙に文句を書きつけて、出て来る)

時田 (受けとつて讀む) ——「キカイウツスヒトヨコセ」ツイデニ……ツイデニ……これやなんだね。ああ、さうか、わかつた。なるほど、はたでみてるよりは、経費けいひが大きいわけだね。(サイダーをコップに注いで飲む) 今日ね、丹羽さん、實は、あんたに少し頼みたいことがあつて来たんですがね。

州太 わたしに……? はあ……。伺つてみませう。

時田 なに、つまらんことなんだが、わしんとこの娘さ。御承知のやうな事情で、今、手許に置いてあるんだが、何時までもあのままぢや可哀相だし、なんとかせにやならんと思つてる。そこで、ひとつ、あんたは顔も廣いし、そのうちに、心當りがあつたらどんなところでもいい、是非世話をしつてやつていただけたらと、昨夜も婆さんと話し合つた次第だ。どうせう、おやちの口から言ふのも可笑しいが、誰がみても、二十八とはみえない若作りではあるし、子供さへこつちへ引取ることになれば、初婚だと言つても疑ふものはなからうと思ふ。それはまあ、よろしいやうにお委せするとして、早い話が、日正さんのやうな方でもだね。

萬一、奥さんを探してらつしやるなんていふ話があつたら、無駄でもいいから、あんた、そばから、ひと言、耳打ちをして下さらんか。——うん、さうか、それや、却つて、さういふ女の方が面白い、なんていふことにならんとも限らんからね。あの方は、まだ獨身だつたね。

州太 獨身になつたといふ話は聞きませんよ。

時田 すると、もうなにかね。奥様がおいでかね。

州太 まあ、さうのやうですな。

時田 そいつは、しまつた。

州太 自分の娘を片つけなければならん男が、餘所の娘さんをお世話するなんていふことは、無論覺えない藝當だとは思ひますが、しかしまた、伺つておいて、何かのお役に立つかも知れません。

時田 いや、おほきに。こちらは別に、望みが高いといふわけでもないんだから、まあいいが、あんたんとこの二葉さんは、そこへ行くと、大分、ああでもなし、かうでもなしだらうな。

州太 (黙つて時計を出して見る)

時田 —— お父さん、今日は是非、二葉さんつていふ方を見て来て頂戴ねつて、わしんとこの娘、餘程楽しみにしていると見えて、出がけにさう言ふんでね。もう少し、お邪魔をさして貰はう。おほかた、着いた時分だね。

州太 (耳を澄まし) あの音がさうでせう。少し遅れましたね。

時田 あんた、忙しけれや、どうぞわしにかまはずに……。

州太 それぢや、ちよつと、失禮します。(部屋にはいり、卓子に向ふ)

時田 (しばらくぢつとしてゐるが) わしも途中まで迎へに行つてこよう。(さう言ひながら自転車を引つ張つて去る)

やがて、とねがテラスに現はれる。

とね (窓の上の盆を片づけながら) 局長さんは、もう歸つたんですか。

州太 ……。

とね 遅いやうですね。

州太 ……。

とね もう、あたしに、返事もして下さらないんですか。

州太 お前のさういふ氣持が、おれには、やり切れないんだ。なにもかもわかつてる。黙つててくれ。

とね あんたは、無理な人ね。かういふとき、あたしは、どうすればいいのか教へておくん
なさいよ。昨夜からそれを訊いてるんぢやありませんか。——お前がいいと思ふやうにし
ろ、こんなことぢやわかりませんよ、あたしには……。二葉さんの前で、あたしは、いつた
い、なんなんです。おつ母さんでもないでせう。そんなら、女中ですか。それならそれでか
まひませんよ。あたしは、なににでもなります。

州太 だから、事實ありのままでもいいぢやないか。

とね ほんとに、いいんですか。でも、あんたは、そのことを一番心配してるんぢやありま
せんか。あたしに隠したつて駄目ですよ。この二三日、そんなら、どうして、あたしに對す
る態度を、がらつと變へちまつたんです。娘さんの方に氣を取られてつて言へばそれまでか
も知れないけれど、あたしにや、もつとあんたの深い氣持がわかるつもりですよ。

州太 ひがむのはよせ。

とね いいえ、ひがみなんかぢやありません。あたしは、ただ、幾度も言ふやうに、二葉さんに會つて、中途半端な口の利き方をするのがいやですからね。娘なら娘、お嬢さんならお嬢さん、さういふところをはつきりさせたいんです。

州太 その、どつちでもなければ仕方がない。

とね ぢや、お友達でいいんですか。それとも姉妹……？

州太 まあ、そんなところさ。

とね さういふ關係で、二葉さんは承知しますか。

州太 承知するもしないもなからう。

とね あんたは、それで、どうもないんですね。

州太 どうもないよ。

とね ほんとですな。

州太 うるさいな。

とね 餘計な苦勞をして、損しちゃつた。

州太 何がだい。

とね あんたが、二葉さんに氣兼ねだらうと思つてよ。

州太 氣兼ねでなくもないがね。

とね それ御覽なさい。

州太 だからと言つて、今更、お前を女中扱ひにも出來まいぢやないか。

とね うれしいわ。

州太 その代り、しつかり頼むよ。つまらんとところで、おれに恥をかかせないでくれ。

とね どういふところ……？

州太 考へたらわかるだらう。

とね わからない。

州太 娘の眼に、おれが道樂者に見えても困るからな。

とね はつきり言つて頂戴よ。

州太 もう、その話はよせ。おれは今、非常に六ヶ敷い問題を考へてるんだ。子供を裁くのは、なぜ親でなければならんかといふ問題だ。おれは、今、親でありながら、子供になつてみてゐる。さうすると、娘の二葉が、實は、娘のやうな氣がしないんだ。まるで母親のやう

な気がする。この氣持は、ちよつとお前にはわかるまいが、それやしみじみとした、嬉しいとも悲しいともつかん氣持だ。もうぢき、あいつがここへ歸つて來て、われわれ二人を不審らしく見くらべるだらう。その時、おれたちは、なにも言ふまい。あいつは、きつと、萬事を察するだらう。おれたちは、そつと、あいつの顔色を見よう。おれは、あいつの眼から、すべての色を読むことができる。もしそれが、憤りか蔑みの色だつたら、おれは、手をついて、あいつに赦しを乞ふつもりだ。

とね

……。

州太 お前には、おれの過去といふものを、まだ話したことがない。あいつの母親は、あいつが生れるとすぐに、おれたちを捨てて行衛を晦ましたのだ。いや、晦ましたわけではない。おれには、今、その女が、何處で何をしてゐるかさへわかつてゐるんだ。

とね

……。

州太 おれが今、なぜこんな話をして聞かせるかと言へば、あいつが今日、この家の中へはいつて來るまでに、それだけのことはお前に知つておいて貰ひたいからだ。あいつが女學校を卒業すると間もなく、おれは、裸一貫に借金を背負ふからだになつた。あいつは、自分で、

食ふ道を探し出した。おれがこの仕事を始めるまで、まる三年、あいつは、親から一錢の小遣も貰つてゐない。

とね

……。

州太 去年の春、おれは、久々で、あいつに晴着を買ふ金を送つた。それと一緒に、おれも、二十五年振りに、お前といふきまつた女を手に入れたわけだ。

とね

手に入れたはひどいでせう。

州太 手に入れたはひどいか。それなら取消さう。

とね 取消さなくつてもいいわよ。

州太 ぢや、どうしよう。

州太は晴れやかに笑ひながら、テラスに姿を現はす。山鳩がしきりに鳴く。

とね

(突然、前の方を指さし) あれ、さうでせう。

州太

ほう。自轉車の護衛がついてるぜ。

とね

お姫様のお成りですもの。

州太

荷馬車の上でバラソルは洒落てるね。(問)

とね 獻さんが大真面目で馬をぶつてるわ。(問)

州太 笑つてやがる。

とね なんとか合圖をしておあげなさいよ。(問)

州太 (聞えないふりをして) なんだ、あの黒い四角な箱は……。(問)

とね 丈が随分高いわね。ちよつと、斷髪かしら……。

遠くで、「ただいまあ」といふ快活な女の聲。州太は、機械的に走り出ようとするが、思ひ直して、そこに踏み止る。立つても坐つてもゐられないやうな氣持を、強ひて抑へてゐる様子がありありと見える。

翌朝。

谿流に菘んだ温泉鑿掘の現場。——櫓、番小屋。

酒樽を水槽とし、その中に寛の水が落ち込んでゐる。

洗面所、洗濯場などの簡単な設備。

斜面の稜線から淺間の頂がのぞいてゐる。

新井務が顔を洗ひ終つて、その場を立去らうとすると、州太が、齒を磨きながらどてら姿で現はれる。無言の會釋。

州太 (呼びとめて) おい、飯を食つたら、驛へ行つて、疊屋へ電話をかけてみてくれ。それから、序に、牛肉を二斤ばかり頼んで來い。

新井 承知しました。僕は、なんなら、番小屋へ寝てもいいんですが……。

州太 (口をすゞぎ) 部屋はあるんだから、かまはないさ。

新井 あれはどうしませう、印刷屋の方は……。今日中に區劃割の地圖だけでも刷つとく方がいいと思ふんですが……。

州太 あゝ、あの方も急いでくれ。お前もちつと忙しすぎるな(顔を洗ひながら)そのうちに、現場の方は、人を一人いれよう。

新井 それより……。 (聲を落し) 今、こんなこと言つちやなんですけど、水道の水管は、あいつ、どうにかならないでせうか。去年の代金を渡さなければ、後を寄越さないつて言つて來てるんですが。

その時、番小屋の裏から、二葉(二十四)がひよつこり姿を現はす。朝日を顔いつばいに受けて、明るく笑つてゐる。

州太 (新井に) その話は、あとでしよう。(二葉に) よう、もう起きてるのか。どうだ、寒くはなかつたか。

二葉 いいえ。今、その邊をすつと歩いて來たとこな。いいところね。

州太 氣に入つたかい。

二葉 なんだか、想像とまるで違ふんですけど、想像よりは、すつと大きな、伸び伸びとした景色ね。

州太 これでも、やうやく、人間が住める場所にしたんだ。來年の夏は、あの上の方に、すつと別荘が建つ。東京の銀座とまでは行くまいが……。自動車も二三臺は置くつもりだ。

二葉 來年の夏つていふと、ずるぶん間があるわね。

州太 それや、お前、未開から文明へ遷るためには相當の年月がかかるよ。その代り、それだけのことをやつてしまへば、わしらも、夏だけ此處にゐて、あとは東京でなりなんなり暮せるわけだ。見といで、お前にも好きなやうなことをさせてやるから……。もうひと辛抱だ。

二葉 好きなことつて、あたし、今のままで結構よ。それに、あたし……。 (さう言ひかけて、番小屋の前のベンチに腰をおろす)

州太 どうした。

二葉 ある人と結婚する約束をしたの。

長い沈黙。

州太 それで……。もつと詳しい話を聴かうぢやないか。

二葉 その人、まだ學校へ行つてるのよ。家はちやんとしてるらしいの。市會議員にもなつたことがあるんですつて、お父さんは……。でも、學校を卒業しないうちは、結婚なんか許してくれないでせう。來年の三月までよ、それも……。家の方で變にとるといけないから、勤めなんかよして、しばらくお父さんのそばにゐてくれつて、その人、あたしに頼むもんだから、さうすることにしたの。すゐぶん、いろいろ考へたのよ。それや、愛してくれてることはたしかなの。家で許してくれなけれや、そんな時は、斷然、飛び出しちまふつて、それほど眞劍なの。

州太 大丈夫かい、こんどは……。前のやうに、また、金持へ養子に行つちまふ男ぢやないのかい。

二葉 あん時こそ、あたし、どうかしてたのよ。まだ二十一だつたんですもの。

州太 専門はなんだ。

二葉 法科から文科に變つたんですつて……。社會學でせう。

州太 學校を出て、どうするつもりなんだ。

二葉 今時、自分の思ふやうな口があるもんですか。お父さんの關係してる會社へでも、使つて貰はうつて言つてるわ。それや、その方が慇巧よ。あたし、無闇に野心家ぶつてる男、嫌ひなの。(間)あの蓄音機ね、山の中で退屈だらうからつて、あの人がくれたのよ。

長い間。

州太 ふむ、さうか。で、もう約束をしまつたんだね。

二葉 ええ。

州太 そんなら、もう、なんにも言ふことはないさ。わしに相談をしなかつたのが、少し手落ちだが、何れにしても結果はおんなじだらう。わしの、たつた一つの楽しみは、お前に、すばらしいお婿さんを見つけてやることだつた。しかしまあ、お前が自分で見つけたのなら、それはそれでもいいさ、すると、お前は、今、先々のことで、なんにも心配はないんだね。

二葉 自分だけのことなら、心配なんか、ちつともしてませんわ。

州太 すると、わしの方のことが、心配だつていふのかい。

二葉 ……。

州太 今度こそは大丈夫だよ。去年から、少しづつでも、お前んところへ小遣を送つてゐる